



教職大学院

Newsletter No. 83

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2016.4.30

日々の歩みの意味を 長い展望の中で問い直す

柳澤 昌一

8年前、教職大学院発足の4月。同時に発刊されたニューズレターの巻頭言に、次のように記しました。

学校の発展は、学校において、そして教師を中心とする協働の実践・研究によってこそ実現される。そうであるとするならば、その場での協働の実践・研究こそ焦点としなければなりません。だからこそ福井大学教職大学院は、学校拠点の協働研究の展開とその省察を中心に据えています。これまでの大学・大学院の常識とそれがいかに大きく隔たっていたとしても、改革の中心がそこにあり、実践と研究の焦点がそこにあるかぎり、新しい大学院の基軸をそこに置くことをためらっているわけにはいきません。

(教職大学院 Newsletter No. 12008.4.1. p.1.)

<http://www.fu-edu.net/sites/default/files/data/newsletter-001.pdf>

それから8年の歩み、学校での実践とその省察を軸とするサイクルの積み重ねの中で、学校と学校、地域と地域、そしてより広い実践と研究のネットワークを結ぶコミュニティが培われてきていることを実感しています。15年前、二〇人ほどの参加者で出発した小さな実践研究会(実践研究福井ラウンドテーブル)は、教職大学院の半年に一度の節目の公開研究集会として位置づけられて以後大きく発展し、この3月には、800名を超える実践交流の集いとなるに至っています。そしてこの春、全国に新たに18の教職大学院が発足します。学校における

協働の実践を支える教職大学院への企図は、大きく広がる時期を迎えています。

福井大学教職大学院にとっても、この春は大きな節目となります。学校改革マネジメントコースが新設され、また OECD イノベーションスクールのプロジェクト、JICA のアフリカの授業研究を支えるための研修が始まることとなります。附属学校と学部・大学院教育の協働の改革も、2年目の、確実な展開が求められる時期を迎えています。

新しい世代の日々の学習と生活を支える教育は、同時にその世代が主体として生きる未来への力をひらく営みでもあります。日々の歩みをとらえ返し、長い展望の中でその歩みの方向性を互いに常に確かめ直す。教職大学院のカンファレンスを、そうした協働の実践省察の場として活かしていきたいと思えます。どうかよろしく願いいたします。

日々の歩みを、長い展望の中で、そして複数の視点を介して問い直す。互いの実践の展開、その長い、あるいは新しい経験から学び、自らの取り組みの展開可能性を探る。教職大学院のカンファレンスを、そうした協働の実践省察の場として活かしていきたいと思えます。お互いにとって新しい段階の出発となる4月の合同カンファレンス。どうかよろしく願いいたします。

目次

- 巻頭言 (1)
- スタッフ・院生紹介 (2)
- 上海報告 (11)
- 学位記授与式・閉講式 (24)
- スケジュール・スタッフ一覧 (26)

スタッフ・院生紹介



小島 啓市 こじま けいいち

赴任してすぐ、Newsletterの担当の方から、「新任の挨拶文を4月8日締め切りでお願いします。」と言われてきました。新規の勤務上の手続きが山積みの中で書いています。

赴任してすぐ、Newsletterの担当の方から、「新任の挨拶文を4月8日締め切りでお願いします。」と言われてきました。新規の勤務上の手続きが山積みの中で書いています。まず、自己紹介から。

4月から教職大学院准教授として本学にお世話になることになりました小島啓市です。私は、31年間、教員をしてきましたが、教諭として小学校で9年、中学校で11年、行政で8年、教頭として小学校で3年務めてきました。昨年度勤務していた小学校は幼稚園併設で、兼務で副園長もしていました。また、教頭時代には、保幼小接続の窓口として、近隣の保育園との交流を通して、アプローチおよびスタートカリキュラムの重要性についても学ばせていただきました。行政での勤務は、福井県立恐竜博物館で恐竜化石の発掘だけでなく、教育普及担当として、セミナーや体験講座の企画・運営に携わってきました。最後の1年は、新設された営業推進課の課長として、民間企業と協働し、県外からの誘客のためのイベント企画や出前展示に携わりました。ひとつの校種だけでなく、いろんな場での経験は、自分の見識を広められただけでなく、保育園幼稚園から中学校まで連携・接続した教育活動を通して、教員の相互交流の重要性を痛感してきました。そして、これからの教職大学院での勤務でも新たな見識を得ることができることは、本当に嬉しい限りです。

4月1日の辞職交付式のあと、何人かの先生方から教職大学院の使命についてお聞きし、プレッシャーと同時に、自己研鑽と使命感に燃える皆さんと一緒によりよい学校づくり、授業づくりについて考えていく期待に胸が膨らみました。

4月2日に教職大学院開校式とオリエンテーションが行われ、今年度新設された管理職として学校経営の在り方について考える「学校改革マネジメントコース」の方を含め約70名の院生の皆さんが一堂に集まり、今年度がスタートしました。院生の皆さんは、緊張の面持ちでしたが、開校式のあとのコース別分科会や学校別分科会では、和やかな雰囲気の中、そ

れぞれが真剣な表情で説明を聞く姿に頼もしさを感じました。教師としての力量を高めるだけでなく、学校が抱える課題をいかに解決していくかという熱い思いも聞かせていただき、誘導される形で私も一緒になって考えていきたいという気持ちが強まりました。

その夜、家で娘と「世界一受けたい授業」のテレビ番組を見ていました。その中で、多くのノーベル賞受賞者を輩出し、世界の知のトップを走るハーバード大学大学院の授業を紹介していました。簡単に説明すると、リーダー養成についてのテーマがあったとすると、教授はほとんど講義をしません。学ぶ意欲が高い院生達は、思い思いに自分なりの意見を述べ合います。しかし、勝手に意見を言うだけで、全く議論にならず話がまとまりません。まとめ役がいないと組織は混乱していきただけになり、組織の中には、リーダーシップをとる者が必要であることを学んでいきます。座学で知識を得るのではなく、肌で実践力を身に付けていくのです。まさしく教職大学院の教育方法と同じです。各々の勤務校、拠点校や連携校での自己実践をカンファレンスで話し合い、教師としての力量やマネジメント力を高めていきます。この時のリーダーは、M2の方になるのかと思います。ハーバード大では、多くの企業の改善事例を学んで、院生がビジネスを展開する時のバイブルとなっているようですが、教職大学院で学ぶ院生の方も各学校での自分の実践や共に学ぶ先生方の実践をもとに教師力を高め、自分のバイブルを創って欲しいと願っています。

私自身、赴任したばかりで、ファインダーからのフォーカスがぼやけている状態ですので、少しでもポイントを合わせなければと、本紙のバックナンバーを読みました。1号から30号までしか目を通せませんでしたが、大学院黎明期の先生方の教員養成に対する熱い思いと在籍した院生の皆さんの試行錯誤しながらも濃縮された学びの足跡に圧倒されると同時に感動をおぼえました。その中には、「実践と理論の往還」、「他者の実践との融合」、「協働する実践と省察の展開」、「結果よりプロセス」というキーワードが見られました。教職大学院開設から8年が経過し、このキーワードのもと実践を積んだ先生方が、学校現場で同僚に刺激を与え、子どもたちのためにさら

なるよりよい授業づくり、学校づくりに邁進されていることに本当に頭が下がります。教師は、教えるのではなく子どもと共に学ぶ姿勢を持ち続けなければなりません。学ぶ意識が高い院生の皆さんと一緒に学び合うこれからの日々が本当に楽しみです。学びながら、私自身のフォーカスが鮮明になるよう歩んでいこうと思います。



小杉 真一郎 こすぎ しんいちろう

4月1日付で、福井県の学校現場からスタッフとして小島啓市先生と一緒に着任いたしました小杉真一郎です。どうぞよろしくお願いいたします。

思い起こせば、この3月で教員となって33年が経ちました。初任校は、話しこぼをもたず、動きも少ない子どもたちのいる施設内養護学校でしたが、そこでの9年間はその後私の教員生活に大きな影響を与えています。「学習」というより遊びや食べ物にも興味を示さない子どもたちにどうかかわったらいいのか、どうしたら「やりたい」意欲をもってもらえるのか、最初の1～2年は頭を抱えっぱなしでした。3年目に担任した生徒に愛称で「ブーちゃん」と呼ばれる子がいました。話しこぼをもたず右半身麻痺で動きもぎこちないものの、いつも明るく活発に動く子でした。彼女はしたくないことは「プイッ」とそっぽを向いて全くやりませんが、自分の思いが伝わりそうな人には、身振りや行動で積極的にかかわっていきました。彼女を担当して3か経ったある日の放課後、施設に忘れ物を届けにきた私を見つけたブーちゃんはよろよろと近寄り、私に手招きをしてきました。「何？」と戸惑っていると、今度は私の手を引いて指導員室に連れ込み、やや高い台に乗っていたラジカセを手で差し示し、お願いポーズをとってきました。私の「ラジカセってほしいの？」の声に「ンー。」とうなずき、ラジカセが手元にくると、どこからか「ラジオ体操」のカセットを持ってきて、自分でセット。曲が流れ、私がラジオ体操を始めると、彼女もケラケラ大笑いしながら楽しそうに体操を始めました。本当に好きで、積極的に人とかかわる力をもっているブーちゃん。この意欲こそが本当に生きる力だな、と感じました。その時から、私は「子どもたちとかかわる際には、まずは人とかかわり合うことの楽しさ、それを子どもたちと共有しよう。それが子どもたちの何かをやってみようという意欲につながるのでは？」と思うようにな

さて、原稿締め切り前日の4月7日、拠点校や連携校で学ぶ教職専門性開発コースの週間カンファレンスが行われ、一緒に話し合いに参加しました。彼らが課題や悩みを自己開示した前向きな表情で語る姿を見て、これからの成長が本当に楽しみです。私も彼らに負けないよう力を尽くしていこうと思いますので、どうぞよろしくお祈りします。

りました。その後、話しこぼをもたずこだわりの強い自閉症の子や肢体不自由で身体をほとんど動かさない子たちの担任もしましたが、どの子もかかわり合うことで人とかかわることを楽しみ、そこから一緒にいろいろな学びや課題に取り組んでいく、かかわる世界を広げていくことができたと思っています。

このころ、勤務校では一人の子どものことを学部教員全員で語り合う、まさにこの教職大学院と同様のカンファレンスが毎週行われていました。その中で、自らの実践を冷静に振り返ること、自分の気づかないことをいろいろな先生方と複数の目で多角的に見ることの大切さを知ることができました。初任校の後、福井県特殊教育センター（現特別支援教育センター）に8年間勤めました。ここでは小中学校に在籍する情緒面や学習面で気がかりな児童生徒（ほとんどが発達障害のある子たち）に学校に向き個別や小集団の指導を行う「巡回指導」に携わりました。知的や運動面でも養護学校で出会った子たちとはかなり力の差があるはずなのに、乱暴な言動が目立ち、学習や課題への意欲が出てこない。そうした子たちにどうしたら学習や課題に意欲的に取り組めるようになるのか、現場の先生やセンターのスタッフと一緒にカンファレンスをし、悩みながらも支えていきました。しかし、小中学校の経験がないのに先生方に助言する自分に矛盾を感じ、結局、現場に飛び込まないと先生方の苦悩や頑張りには分からないのではと思い、小学校へ転勤しました。そこで、特別支援学級担任、教育相談担当、特別支援教育コーディネーターの役割を担いながら、多くの先生方の忙しさと勤勉さを知り、発達障害やインテグレートしている児童生徒への対応を熱心に考えている様子も間近に見ることができました。中には、今でいうユニバーサルデザイン化された授業や学級環境を自然に作り上げている先生もおられました。小学校9年間で、子どもたちの支援について、現実的にどうするのか、どこまでできるのかを先生方と一緒に話し合い、自分なりに実践できたことは、大切な経験だったと思います。センター時代から小学校勤務時代までにかか

わった子たちの大半は成人し、ほとんどが、ありがたいことに自立した生活を送っています。彼らと私たち教員が一緒になってかかわる中で、互いの間の信頼感が深まり、彼らの情緒が安定し、やがて学習課題にも自信や意欲がもてるようになりました。子どもたちの実態は違っても、重度重複の子どもたちも発達障害の子どもたちも人とのかかわり合いが大切であり、複数の先生と一緒に多角的に見ながら支えていくことが大切であることも改めて実感できた日々でありました。

その後、現場を離れ、福井市教委に2年間勤務し、次の3年間は県教委で三田村先生のご指導の下、行



佐藤 琢磨 さとう たくま

はじめまして。今年度から福井教職大学院教職専門性開発コースに入学させていただきました佐藤琢磨と申します。F1レーサーの佐藤琢磨選手と同姓同名ですが、車の運転はまだあまり上手くありません……。岐阜県の郡上市出身です。夏は徹夜踊りが、冬はウィンタースポーツが有名な、水も人も美しい街です。

教師を目指した経験は、中学校時代の体験にあります。当時、体重が100Kg近くあった私はじめにあい、中学校1年生の秋から3年生の春までの間、約1年半の不登校を経験しました。学校にも行けず、勉強にも人間関係にもついて行けず、不安のただ中であつた私を支えてくれたのは、家族と友人、そして恩師であるA教頭先生でした。A先生は毎朝1~2時間だけ別室登校していた私に何も言わず、少し長めの朝読書につき合ってください、読んだ本の感想を語り合うということを1年以上の間続けてくださいました。私が司馬遼太郎の大ファンだと知ると、図書館から司馬遼太郎の小説をこっそり持ってきてくださって、私のためだけの本棚を作ってくださいたりもしました。その時受けた温かい愛情に、中学を卒業して7年経った今でも支えられています。



川崎 未央 かわさき みお

はじめまして！教職専門性開発コースに入学した川崎未央です。3月まで京都女子大学文学部英文学科に在籍し、この春から地元福井県に戻ってきました。もともと英語と教職に興味があったため、大学では両方の授業を履修してきました。

政の大切さも学ばせていただきました。そして、この2年間は、小学校の教頭として学校運営に携わりながら、気がかりな児童がたくさん在籍する学校に勤務しました。そこで、乱暴で教室に入らない二人の児童との出逢いの中で、人とのかかわりの中で自信をもち心が安定すれば、誰もが本来もっている学びたい意欲を発揮できることを再認識しました。

今までの多くの子たちや先生方との出会いやかかわり合いが、今も私の教員としての学ぶ意欲を支えています。教職大学院でも自身の学ぶ意欲を持続し、院生の方たちと一緒に新しい世界へ踏み出せることを楽しみにしています。

中学校の先生方に支えられて地元の公立高校に進学した後、高校でもたくさんの先生に支えられて、滋賀県立大学へと進学しました。「次は私が、生きづらさを抱える子どもたちに寄り添い、少しでも前を向いて生きていけるよう、お手伝いをしたい。」その思いから、大学では、「子どもの貧困」について学習しながら、子どもの居場所づくりと学習支援に取り組むボランティアに4年間携わって参りました。その中で、行きづらさと向き合いながらも、笑いながら強くしなやかに生きる子どもたちと出会うことができました。

今は大人も子どもも、「生きる」ということが本当に難しい時代です。子どもに、地域の人々にどう寄り添い、教師として何ができるのか。子どもも教師を割らアイ、鍛え合う福井の空気を胸いっぱい吸い込んで考えたいと思います。分からないことは何でも質問し、不安は吐き出し、現場の先生方、先輩や仲間みんなの技術を「盗む」という気概を持ち、前向きに努力いたします。未熟者でたくさんご迷惑をおかけすると思いますが、何卒よろしく願いいたします。

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

4月からは、附属小学校でインターンシップをさせていただくこととなります。

大学時代は、母校の小学校で2週間、中学校で3週間の教育実習をさせていただきました。小学校での実習で、特に感じたことは、子どもに興味を持たせ、思考させる授業を計画することの難しさです。それまでの大学の授業で、学習指導案を作成したり模擬

授業を行ったりしてきましたが、そこに実際の児童はいなかったため、実習先の子どもの目の前に初めて自分が授業を行ってみて、さらに、教師のどのような問いや声掛けが子どもの思考のきっかけになるのかがものすごく気になりました。中学校での実習では、日常的にも将来的にも英語を使うことが少なく、英語を学ぶ必要性が明確でない子どもたちもいる中で、英語が好きだと思ってもらえるような授業をすること、社会に出たときに必要な力をどのような英語の授業を通して身に付けさせるのかを考えるということの大切さを学びました。

また、教育実習後からは、大学の近くの小学校で、学生ボランティアとして週に一回授業の学習支援をしながら、子どもたちと関わらせていただく機会がありました。そこで、私は、集中が続かず、ノートをとったり問題を解いたりすることができず全く授業についていけない子どもと出会いました。最初はなかなか言うことを聞いてもらえず、このままではこの子がどんどん授業においていかれてしまうと思い、

いつの間にか頭ごなしに言ってしまい逆効果になってしまったときもありました。しかし、授業中だけでなく、その子と一緒に給食を食べたり休み時間に話したりする時間を経て、以前よりは少しまく関わられるようになりました。このことから、どんな子どもに対しても、じっくり向き合い時間をかけて関係を築いていくこと、その子の得意なことと苦手なことを見極めて指導に生かすことがどれだけ重要かを身をもって感じることができました。

教職大学院では、これまでの経験もふまえながら、子どもに寄り添う授業とはどのようなものか、現代を生きていく上で必要な力をどのように学校生活や授業を通して身に付けさせるのかについて学んでいきたいと思います。子どもたちが幸せな将来を送ることができるよう、また生まれ育ったこの福井県に少しでも恩返しができるよう、一日一日を大切にしながら精進します。至らない点も多いかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。



小形 光輝 おがた みつき

今年度教職専門性開発コースに入学いたしました小形光輝です。音楽教育（特に声楽）を専門としております。

私が音楽教師を目指すきっかけになったのは福井大学教育学部附属中学校での音楽でした。入学当時さほど音楽に興味もなく、特に自慢できるような点もなかった私が見た2年生による創作音楽ドラマ、文化祭での3年生による「Gloria」は私の身体に、心に強烈に響きました。その歴史の一ページを作っていきたい。そう思うようになった私は創作音楽ドラマでソロの役を演じ、「Gloria」のテノールソロを歌いきり、後輩たちに文化を継承することができました。その中で私は歌唱によって仲間たちに認められ、アイデンティティを確立していくことができたように感じた瞬間がいくつもありました。そして、この経験を今度は教育者として多くの生徒たちに味わってほしいと思うようになったのです。その後、合唱の世界にのめり込んでいった私は金沢大学に進学し、音楽教育を学んだ後、故郷である福井に戻り、本校に入学することとなりました。そして私は4月から福井大学教育学部附属中学校に1年間インターンシップを行うことになったのです。

私が母校を卒業し、8年近くの歳月が流れた。附属中学校は一部改修工事が始まり、私たちが3年間歌い続けてきた音楽室は昨年取り壊され、現在では附属小学校の体育館下に移されています。今年で体育館も工事が入るとのことで私の見てきた附属中学校は変化しつつありました。しかし、その中で音楽文化は今なお生徒たちの中にならなく息づいています。私はこの一年間で生徒たちの学びが文化となって次の代に継承されていく姿を今度は客観的な視点から見たい、そしてその中で音楽教育がもたらす生徒の成長を見ていきたいのです。

また、音楽教育で私が最も重要だと感じているのは「音楽に感動する」ということです。音楽は絵画や彫刻と違い、楽譜という形でしか可視化できず、演奏と同時に消えていく瞬間の芸術です。その一瞬の音に生命を吹き込むために私たちは何を学び、何を考えなければならないのか。それが音楽教育の最も重要な部分であるように思います。そういった音楽教育の根本を見つめ、これからの音楽教育のあり方を模索していけたらと思っています。多くの方々のご縁によっていただいたこの2年間を飛躍の年にしていけたらと思います。



山内 愛音 やまうち あいね

はじめまして。今年度から教職大学院教職専門性開発コースに入学しました山内愛音です。福井県出身で、3月まで福井大学の教育地域科学部障害児教育コースに在籍しておりました。4月からは東特別支援学校でインターンシップをさせていただきます。

大学の主免教育実習では、特別支援学校の高等部で1ヶ月間教育実習をさせて頂き、主に授業づくりや生徒とのかかわりについて学びました。教育実習で実際に授業をした際、生徒の知的好奇心や自発性を促すような授業展開について課題を感じました。生徒が主体的に、意欲的に学ぶことができるような授業を目指していながらも、自分自身が授業者となると予定通りに進めたい、というような焦り等から、生徒の気持ちに寄り添った支援ができなくなってしまいました。そこで授業を行う難しさを痛感しました。また、実習中は学校に慣れようと思っている間にも、あっという間に実習期間が終わってしまい、教師の仕事の全体像を学ぶことはできませんでした。このような状況の中、大学卒業後の進路を考えた時に、課題だらけのまま現場に入ることに大きな

不安を感じました。そこで、長期インターンシップで教員の仕事について実践的に学ぶことができる、この教職大学院に入学したいと考えました。

これからの長期インターンシップでは、初めてのことで分からなかったり、悩んだりすることも多々あると思いますが、大学4年間で学んできた、子どもの行動の意味を考えることの重要性を意識して、子どもの気持ちに寄り添った支援をしたいと考えています。また、子どもの将来を見据えた長いスパンで、現時点で子どもに必要な力は何かを考え、成長を促すためにはどのような支援をすべきなのか、支援者として何ができるのかを常に考えながら、これからのインターンシップに臨みたいと思います。先生方と子どもとのかかわりを観させてもらったり、授業を観させてもらったりしながら、じっくりと子どもと信頼関係を築いていきたいと思っています。子どもたちとのかかわりはもちろんのこと、学校で世話になる先生方、大学院で支えて下さる先生方とのかかわりを大切にしながら、多くのことを学ばせてもらいたいと思います。ご迷惑をおかけすると思いますが、2年間よろしくお願いします。



廣田 久奈 ひろた ひさな

初めまして。今年度、教職専門性開発コースに入学した廣田久奈です。出身は京都府で、3月まで佛教大学教育学部で障がい児教育について学んでいました。4月からは福井大学教育学部附属特別支援学校でインターンシップをさせていただきます。よろしくお願いします。

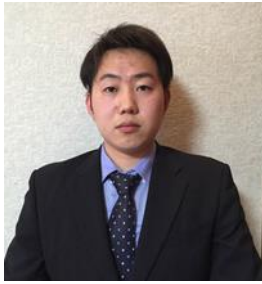
大学では、3・4年生で、教育職インターンシップや養成講座等で、京都府の特別支援学校で演習をしていました。小学部の重度のクラスと中学部の軽度のクラスに配属され、子どもとのかかわり方や行動の読みとり方について学んでいました。しかし、短期間かつクラス担当が替わったりと、児童・生徒の様子を知った瞬間に、演習が終わってしまうという繰り返しでした。その中でも、教師が仕事に追われ子どもたちが一人で遊んでいたりと、行事に追われて子どもたちが泣いていたりと、教師が連絡帳に夢中になり子どもが教室から逃げ出したりという現状を目の当たりにしました。教師は、忙しい中でも、子どもたちのペースでゆっくり「見守る」姿勢を持たな

ければならないと実感しました。また、自立活動等、個別課題の時間で、先生方が教材教具を工夫して授業を進めている場面も目にすることができました。そのときは教材教具について学ぶ機会がなかったため、今回のインターンシップでは教材教具について学んでいきたいと考えています。今回のインターンシップでは他に、教師間の連携や教室環境、子どもとのかかわり方についても学んでいきたいと思っています。

今回は、長期インターンシップということで子どもたちと1年間、関係性が築いていけるとということ、学校の組織に入っていけるとということで、先生方の子どものとのかかわり方などをよく観察し、微力ながら組織の中で動けるように頑張っていきたいと思っています。また学び続けることを忘れずに、先輩の先生方の意見に素直に耳を傾け、そして実践を見せていただき、自分の中に吸収していきたいと思っています。

私は、今回すべて新しい環境でやっていくことを決意し、不安も多くありますが、様々な人とのかかわり、出会いに感謝して、日々精進していきたいと思

います。慣れないことも多く、迷惑もかけてしまうかもしれませんが、これからもご指導のほどよろしくお願いします。



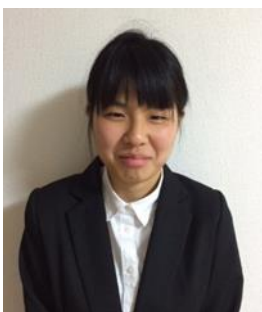
竹内 瑞貴 たけうち みずき

今年度から、教職大学院教職専門開発コースで学ぶことになりました、竹内瑞貴です。福井県福井市出身で専門は社会科です。昨年度までは、関西学院大学文学部地理学地域文化学専修に在籍しておりました。学部時代は、地理分野の高い専門性を学ぶことができました。卒業論文のテーマを決めるときに、卒業後は地元の教員になりたかったので、少しでも福井のことについて調査したいと思いました。大学の受験勉強中にアメリカのラスベガスが砂漠気候であったにもかかわらず発展しているのは、ダムがあるからだとわかり、ずっとダムのことに興味を持っていました。福井県にも池田町で現在建設中のダムがあることを知り、「足羽川ダムと地域との関係性」というテーマで研究しようと思いました。足羽川ダムは、ラスベガスのそれとは違い、福井豪雨や長年のいきさつがある深い問題を抱えてることもわかりました。住民や地域といったそれぞれ小さな規模で、聞き取り調査をおこなったり、フィールドワークや文献研究をおこなって、論文の執筆をしました。福井の水利や農業のこと、産業や歴史・経済等多方面のことも学ぶことができとても有意義な時間であり、結果を出せたと思

っています。ただ、文学部なので、教員になるための教育に関する授業は、教員免許状取得に必要な最低限のものしか履修しておりません。

昨年、至民中学校に教育実習に行きましたが、立派な教員になりたいと思う反面、知識や実践不足に対して大きな不安がありました。生徒の問題行動に対してどのように対処すればよいのか分からず、担当の先生に報告するだけになってしまいました。実践力、生徒指導力が足りないと思い、今のままでは教員として使えないと力不足を感じていました。そんなとき、教職大学院の先輩等に、教職大学院についての制度を教わりました。実践力を養い専門的な知識を身に付けたいと思っていたので、教職大学院に進学しようと決めました。4月からは、母校である至民中学校でインターンシップをすることになりました。至民中学校のインターンシップでは、先生方の生徒指導や授業づくりなど多くのことを学び、参考にして、自分自身で生徒指導を出来るようになることを目標にしています。

教員には、様々な能力が求められています。その中でも生徒指導力、教科指導力、部活指導力が重要であると考えます。まだまだ手探りの状態ですが、何事にも全力で取り組みたいと思います。2年間、精一杯頑張ります。よろしくお願いします。



北本 瑞穂 きたもと みずほ

はじめまして。この春から、教職大学院の教職専門性開発コースに入学した北本瑞穂と申します。出身は石川県で、北陸学院大学を卒業しました。幼稚園教諭と小学校教諭の免許を取得しました。私が教職大学院に入学した理由は、3つあります。1つ目は、先生が行う指導や学級経営を見て学びたいと思ったからです。学部3年次の教育実習では、子ども達への指導の仕方や授業の仕方などを4週間通して学びました。4週間はとても短く、振り返るとまだまだ学ぶことがたくさんあったのではないかと思います。教職大学院では、1年間を通して学ぶことができるので、子供の成長がより明確に見え、その成長を間近で感じるのではないかと

と考えています。2つ目は、小学校現場に行き、実際の指導を見ながら学びたいと思ったからです。学部4年次には、小学校へ週に1度ボランティアを行っており、その中で、算数を苦手とする児童に対し、効果的な指導法を研究していました。その研究を基に、今後現場へ出向き、どのように教師が子ども達に指導しているのか、子ども達の意欲をどのように高めているのかを学び、見識を深めたいと思います。また、自分の中で子ども達にとって効果的な指導法は何かを考えていきたいです。3つ目は、学びが深まる2年間を過ごすことができると思ったからです。福井大学教職大学院では、実践を重点と置き、そして、様々な年齢の人たちや職種の人たちと意見交換をすることで、自分の考え方や視野を広げることができると説明会で先生たちから伺いまし

た。様々な経験を積んでいる方々と一緒に学びを深めることで、自分の糧にしていきたいと思えます。

以上の3点から、福井大学教職大学院の進学を決意しました。自分にとってこの2年間で学びの深いものになるようにしていきたいです。



中山 詩菜 なかやま しな

はじめまして。教職専門性開発コースの中山詩菜です。中学校と高校の免許を取得しており、専門教科は英語です。これから2年間、福井大学教育学部附属中学校でインターンシップをさせていただきます。充実したものになるように、1つ1つの積み重ねを大切にしていきたいです。ここではまず自分の生い立ちを述べた後、教職大学院で深めていきたいこと、抱負を述べたいと思えます。

出身は富山県です。親の教育のおかげで、幼いころから英語に興味を持つようになっていました。中学生のころから留学に行きたい、と強く思うようになり、富山高等専門学校国際流通学科に入学して、3年生の時に1年間カナダに語学留学を経験します。留学先ではインターナショナルスクールに通い、課外活動としてボランティアで日本語のチューターをしたりもしていました。その中で、考え方や価値観が異なる様々な人たちとの交流を通して、異文化を理解すること、日本文化を改めて考えることといった、違いを共有しあい、深めていくことの面白さを実感することができました。高専卒業後は、ことばそのものの仕組みや、コミュニケーションの仕組みについて更に勉強したいという思いから、奈良女子大学に編入し、言語学を専攻しました。2年間しか大学にはいませんでしたが、認知言語学や語用

4月からは、附属小学校でインターンに入らせていただくことになりました。附属小学校の先生方や大学院の先輩や同期の方から多くのことを学びたいと考えています。辛いことなどたくさんあると思いますが、自分にとって視野を広げる2年間にしていきたいです。よろしくお願ひします。

論、音韻論など様々な分野についても学ぶことができ、また別の観点からことばについて考えることができたと思っています。また、元女子高等師範学校という伝統ある大学での教職の授業・実習からもたくさんのことを学びました。授業観察をしたり、実際に授業を試みたりと、初めての経験ばかりで、教育することの難しさを痛感した、とても充実した日々でした。

現段階では子どもの動機付けについてや、語学学習による子どもの成長の仕組みとその効果的なカリキュラム作成などについて、実践を通して考えたことをもとに研究していきたいと考えています。またそれと同時に、自分も学習者として、英語の運用能力を日々鍛錬していかなければならないと思っています。インターンでは、総合的な学習の時間や課外活動など授業以外の生徒の様子を観察しつつ、その成長を支援できるために、自分には何が必要で、どのような力をつけていかなければならないのか考えながら、有意義なものにしていきたいです。中でも英語科の授業では、なぜこの活動を行うのか、この授業で学ばせたいことは何かをしっかりと考え抜きながら授業を作っていくこと、そして実際の授業では、その授業の目的を念頭に置きながらも、生徒をよく観察して、生徒と一緒に授業をつくっていくことの大切さを忘れずに頑張っていきたいです。どうぞよろしくお願ひいたします。



田中 亮 たなか りょう

はじめまして、この度、福井大学教職大学院教職開発専攻教職専門性開発コースに入学しました、田中亮です。専門は保健体育です。福

井県出身で、福井大学教育地域科学部附属小、中学校を卒業し、福井県立高志高校を卒業後、東海大学に入学しました。卒業後は神奈川県立横須賀工業高等学校で一年間、保健体育の臨時的任用職員を務めさせていただきました。大学では文学の面では、文

明学について学ばせていただき、私が大学生活のなかで取り組んでいたストリートダンスについての文化や歴史、現状について興味を持ち、実際に駅で踊っている人にインタビューを行い、駅員の方に実際に駅でダンサーが踊っていることについてどう思っているかを取材させていただくなどの活動をしていました。

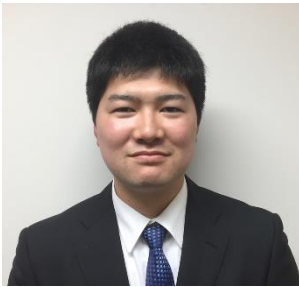
保健体育の面では、先生方からさまざまな体育の領域の授業づくりのヒントをいただき、実際に学生に生徒役をしてもらい授業をするなど多くのことを体験させていただきました。

大学を卒業して講師をさせていただいた期間には、初めて現場に出て何もできず、どうしようもなかった甘い私を見捨てずに1年間厳しく教えていただきました。そこで体育科の先輩の先生に教えていただいた「常に緊張感を持ち続ける」、「常に起こりうることを考える」、「常にアンテナを張り続ける」、「安全面の配慮を徹底する」この4点は自分の基盤として常に持ち続けていこうと思っています。

講師としてやらせていただく中で、毎回の授業に追われて、自分の授業がどうだったか振り返る時間がないと感じ、そんな疑念を持ったまま生徒の前で授業をすることが生徒に申し訳なく感じていました。また、なにをやるかあやふやなまま授業をしたとき生徒から「先生の今日の授業つまんない。」と言われ自分の教材研究の乏しさと自分の余裕のなさを思い知りました。もっと生徒が楽しく活発に

授業に取り組めるような授業をしたい。そういう思いが強くなっていき、地元である福井大学の教職大学院の存在を知り調べていくうちに、私は「長期のインターンシップやさまざまな活動を通して、多くの授業を見る、そして見ていただくことで自分の授業づくりの幅が広がり成長できる。」と思い今年からこちらにお世話になることを決めました。

私は、生徒が生涯を通じてずっとなんらかの競技にかかわっていけるように、生徒がふざけるのではなく楽しく、クラス全体で協力しあえる授業をつかっていきたいです。そして講師の期間で学んだ生徒指導とインターンシップでこれから学ぶ授業方法を上手く組み合わせた教員になりたいと思っています。何事にもぶれないことをこころがけて頑張っていきますので2年間どうぞよろしくお願ひします。



福岡 友輝 ふくおか ともき

はじめまして。今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学した福岡友輝です。福井県福井市、福井大学出身の生

粋のふくいっ子です。専門教科は社会科で、大学では社会科教育を専門に学んできました。4月からは附属小学校でインターンシップをさせていただきます。将来の展望は、地元福井で小学校教員になり、子供たちに福井のことをより知ってもらい、福井を好きになってもらうことです。

大学入学当初の私は、ただ社会科という教科が好きであり、社会科を学ぶ楽しさを子供たちにも感じてほしいという理由から教師を目指そうと考えていました。しかし、大学の授業においてさまざまなコースの学生と接するようになり、社会科が必ずしも好きではない人々が多いという現実を知りました。極めつけは、子供から、「なぜ社会科を学ばなければならないのか？」と質問を投げかけられたことでした。この質問を直に突きつけられ時、私は即答することができませんでした。当時の私は、社会科が苦手な子供のその背景を考えようとしていなかったからです。その日以来、ただ勉強を教えるだけで

はなく、その先を見据えて子供たちに教えていくことが必要であると考えようになりました。これはどの教科の学習にも当てはまります。やらされる勉強ではなく、自主的な学びを生み出すために、学びの必要性ではなく、可能性を子供たちが感じることでできるような授業を実践していきたいと思ひます。子供の学びに火をつけるためには子供の興味・関心、得意・不得意などについて教師が把握しておくことが前提となってくると考えます。子供の行動は何か理由があって行なわれているのではないかという意識のもとで、その子供が何を考え、何を教師に伝えようとしているのかを、アンテナを伸ばしながらキャッチし続ける必要があります。長期インターンシップやカンファレンスにおいて、インターン生やメンターの先生、大学院の先生方と協力しながら子供の実態についての理解を深めていきたいです。

わからないことだらけの環境の中で、至らない点も多いと思ひますが、これからの2年間は出会うすべての人々との関係に感謝し、1日1発見を目標に、学びを深めていきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



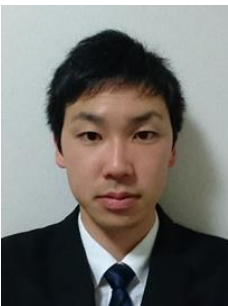
山上 晃平 やまがみ こうへい

はじめまして。この度、教職大学院教職専門性開発コースに入学することになりました山上晃平と申します。出身は大阪府で、福井での生活は今年で5年目となり、福井大学には学部の時から

お世話になっています。おかげさまで、私にとって福井という地は第2の故郷になり、とても愛着のある場所となりました。この福井という地でのたくさんの出会いは私にとってかけがえのない宝物となっています。しかし、将来は地元大阪に戻り、小学校教員になりたいと考えています。福井で教員となり、福井に恩返ししたいという気持ちもありますが、しっかりと本学で学び、それを地元大阪に持ち帰り、学んだことを活かし発信していくことができればいいと考えています。免許は小学校1種、中学校社会科1種、特別支援学校1種を取得しています。

4月からは附属小学校でインターンシップをさせていただきます。附属小学校には大学3年次の教育実習で一度お世話になっており、様々なことを学

ばせていただきました。しかし、4月から始まる長期インターンシップでは教育実習時以上の学びがあることを期待しています。そのためにも、日々の活動を大切に、子供たちや先生方とのコミュニケーションを積極的にはかり、自分から学んでいく姿勢を心がけていこうと考えています。その日々の活動の中で教師という職業のやりがいを感じ、自分にとって理想の教師に一步でも近づけるような2年間にしていきたいと考えています。私は小学校のときの先生に憧れ、この教育の世界に入ってきました。そして、その憧れてきた職業が手の届くところまでやってきました。教師になりたいという思いは教師に憧れ抱いたその時から今に至るまで変わっていません。だからこそ、教師になったときに教師になったことを後悔したくありません。そのためにも今の自分にできることを全力で行い、教師になるための準備をこの長期インターンシップを通して行い、満を持して教師の世界に飛び込んでいきたいと考えています。まだまだ未熟な私ですが、どうぞよろしくお祈りします。



谷口 貴一 たにぐち けいち

初めまして。今年度、福井大学教職大学院教職専門性コースに入学しました谷口貴一です。小学校免許取得のため、これから3年間お世話になります。どうぞよろしくお祈り致します。

私は小学校、中学校、高等学校と福井県で過ごし、高校卒業後は関東に上京し、帝京大学で中学・高等学校の教員免許状(保健体育)取得に努めました。小学校の教員免許状も取得したいと思い教職大学院に入学しました。専門競技は陸上競技の長距離走です。小学校3年から大学2年までの約12年間競技に打ち込んできました。振り返ると辛いことの方が多かったですが、陸上競技のおかげで多くの仲間がいき、たくさんの経験をする事ができました。大変貴重な財産としてこれからに生かしていきたいと考えています。

学生時代は、各講義や教職実践演習、教育実習に取り組んできました。講義では多くの知識を学ぶことができました。しかし、教育実習で学校現場を訪れた際、実践的な力が足りないと感じました。教職大学院での長期インターンシップで、現場の先生方や

大学院の教授、先輩方、同期のみんなから見聞きし、多くのことを学びたいと思っています。教員になるという同じ目標をもった者が集まるこの環境で、互いに切磋琢磨し、自分の力を付けていきたい、多面的な考え方や物の見方を身につけたいと思います。教職大学院での3年間を実のある濃い時間にしていきます。

私の目指す教師像は、第一に思いやりの心を持って子供と接し、子どもの話を最後まで聞くことができる教師、第二に学び続ける精神を持つ、自らの専門性を高める教師、第三に一人ひとりの子どもに応じた適切な指導、助言のできる教師です。教師の一言は、子どもに大きな影響を与えます。教師が日々児童の可能性を信じ、常に肯定的な言葉かけを行うことにより、児童の自己肯定感を養いながら成長できると考えます。児童と共に感動を分かち合い、自分の持っている「強み」と経験を生かし、信頼される教師を目指します。

4月からは福井市立中藤小学校で長期インターンシップをさせて頂くことになりました。非常に大きな学校で生徒数も多く、どんな児童に出会えるのか

楽しみです。児童と共に私も成長していきたいと思っています。

上海報告

上海師範大学等への訪問と交流の報告 森 透

私たちは2月29日(月)から3月3日(木)まで中国・上海の上海師範大学及び上海師範大学天華学院、そして2つの小学校と1つの幼稚園を訪問しました。小学校では院生たちが美術の授業をさせていただき、非常に感謝しています。準備段階では、上海とうまく連絡が取れず心配しましたが、今回の訪問では初期の目的がほぼ達成され、非常に毎日が楽しく充実していました。参加者は、教員が4名、教職大学院生4名、美術科の院生3名・学部生1名の合計12名。直前で長谷川久里子院生がインフルエンザで参加できなくなりました。毎週木曜日の夜、全員で中国で美術の授業をするために準備をしてきましたので本当に残念でした。私たちは彼女のみで頑張ろうと決意したのでした。

＜教職大学院＞森透・松木健一・半原芳子・山田芳裕・増谷淳・松山琴美・池田丈明

＜美術科＞濱口由美・志田夕華・服部知真・安本晃央・高橋葵彩＜全体の訪問スケジュール＞

2月29日

・9時・大学集合10名、小松空港へ出発。13時30分小松空港発→15時上海浦東国際空港着。劉先生が出迎え。送迎バスで上海師範大学へ。

・森・半原は拠点校である東京都板橋区立中台の公開研参加(翌日に上海へ)

3月1日

・午前、上海師範大学近くの小学校で美術の授業実践(「第4学年 図画工作科学習指導案」)(35分)
＜通訳＞上海師範大学日本語科学生、上海師範大学天華学院日本語科学生、合計7名が各グループに入り通訳(謝金支払い)。池田院生は中国語が堪能で通訳なし。

・森・半原は 8時40分羽田空港発→10時30分上海浦東国際空港着。送迎バスで午後の嘉定区甫苑小学へ合流。

・午後は上海師範大学天華学院近くの嘉定区甫苑小学で美術の授業実践。午後の最初は美術(墨絵)の授業参観。終了後、院生による美術授業の実践(1時間程度)。対象は4年生、約40名。

・終了後、懇談会。16時過ぎにバスで上海師範大学天華学院訪問。天華学院院生・学生との交流会。教員は別室で学術交流。終了後、会食。21時頃にゲス

トハウス到着。

3月2日

・張先生(前上海市教育委員会)のご案内で上海市における模範幼児教育機関である荷花池幼稚園を訪問。

→8時 ゲストハウス正門で集合。9時から園舎見学。芸術教育の特色を持つ幼稚園なので音楽の授業を参観。その後幼稚園の先生方と懇談。本格的な料理長さんによるケーキやお菓子をご馳走に。11時参観終了、近くのワンタン麺のお店で昼食。14時過ぎに上海師範大学に戻る。

・午後は14時から教師志望の上海師範大学院生へのインタビュー(5名)を予定。到着が遅れ14時30分頃開始。17時頃に終了。その後は市内観光へ。

→福井大学教職大学院の実践紹介と美術科の実践紹介。上海師範大学の董玉琦先生(前東北師範大学教授)も同席。

＜上海師範大学院生＞林梓(日本語学習歴有)、陈艺劼、朱华卉、汪德云、吕叔阳。

＜場所＞上海師範大学留学生センター2階3号室(西キャンパス)。

＜通訳＞上海師範大学天華学院講師の張麗珺先生(上海師範大学博士課程院生/謝金支払い)

3月3日

6時30分、ゲストハウス出発。7時30分に空港到着。9時25分上海浦東国際空港発→12時30分小松空港着。13時30分頃、無事に福井大学到着。

＜今回の訪問の目的と内容＞

・美術科の院生・学生4名と教職大学院院生4名の合計8名で、上海の小学校で美術の授業を実践すること。具体的には、「世界児童画展」に出品された世界の子どもたちの絵画8枚を8グループで鑑賞して、そこで感じた内容を身体表現すること。グループの中で感じた内容を意見交換して、最後は各グループごとに発表会を行った。発表会は笑いに包まれ温かい雰囲気で行われた。午後の小学校では、先生方と授業後に懇談の場があり、相手校の先生方から今回の院生の授業を参観して美術の授業の面白さや可能性を感じられ、今後の授業の参考にしたいという感想も出された。

・上海師範大学大学院で将来教師を目指している
院生 5 名にインタビューをすること。

教職大学院と美術科の資料をもとに行った。その後、2つのプレゼンテーションへの質問を上海師範大学院生から出してもらった。質問内容は、①中国は男性教師が少ないが日本ではどうか、②なぜ教師になろうと考えたのか、③小・中学校で実践をして週1日大学で振り返りを行っているが、「悩み」とはどのような内容か、④中国では保護者との交流を大事にしているが、日本ではどうか、⑤学期末に教師への評価があるのか、⑥ICTのリテラシーは求められるのか、⑦小学校の教師は子どもに優しくしているのか、それとも普通に接しているのか、などが出された。これらの質問に対して、福井大学の院生たちが一生懸命自分たちの実践をもとに真摯に答えている姿が印象的であった。ときどき笑いも起こり、和やかな中で交流が行われた。

その後、上海師範大学の教師教育について院生たちに話していただいた。話しの中心は学部の授業紹介が中心で講義と教育実習があるとのことであった。私が大学院の教師教育について質問したら、大学院では講義と研究が中心で、現場に出掛けるということは少ないとのことであった。大学院の教師教育についてもう少し具体的にお聞きしたかったが、今後の課題とすることとした。今後、院生の交流が積極的に行われ、日本と中国の教師教育の比較と学び合いが行われることを期待したい。

最後に上海師範大学の董玉琦先生(前東北師範大学教授)に東北師範大学の学校拠点の実践報告をしていただいた。董先生は2年ほど前に上海師範大学に異動されたが、東北師範大学の教師教育についての報告で、大学(U)と学校(S)と政府・教育委員

会(G)の三者の関係図を示しながら、三者が連携して教師教育に取り組んでいるという報告であった。東北師範大学は中国の内陸部にあり非常に広大は地域の中での教師教育実践で、学校拠点方式については教員と院生で長期にわたる合宿生活を行い拠点校での実践を行っている。報告後の松木先生の質問に対して、董先生は現状ではいろいろな問題点や課題があるというお答えであった。

休憩を入れて2時間ほどの長いインタビューと交流会であったが、私にとっては今までの4回の訪問の中で、初めて教師教育について院生たちと直接交流ができたことが非常に嬉しかった。

<まとめ>

私は今回の訪問が4回目である。詳しくはニューズレター51・62・63・69・70号参照。今回の成果は第1に美術の授業を2つの小学校で実践できたこと、第2に上海師範大学の教員志望の院生と董教授との交流会ができたことである。

最後に、今回の訪問にあたって、準備の段階から上海師範大学の劉特任教授、及びメールで詳しい打ち合わせをすることが出来た張麗瑀先生(上海師範大学天華学院講師)のお二人に深く感謝申し上げたい。張先生は現在、上海師範大学大学院の博士課程在籍で博士論文を執筆されている。テーマは「中国と日本の教師教育」であり、張先生は福井大学教職大学院の取組みに関心をもち、特に教員免許更新講習に関する福井大学の必修領域の取組みを深く共感し分析されている。講義が中心の更新講習ではなく小グループで省察を中核にした福井大学の取組みの重要性に着目された。論文の完成に期待するとともに、今回の訪問への感謝を改めて申し上げます。(2016年3月20日記)

協働への挑戦 半原芳子

今回、教職大学院のストレートマスターの院生と本学美術科の学部生・院生、教員の合わせて12名で上海視察に行く機会に恵まれた。上海では、学術協定を結んでいる上海師範大学への訪問、公立の幼稚園・小学校の視察、さらには今回上海の教員志望の院生(上海師範大学天華学院の院生)との交流が実現し、実に実りある時間となった。これらが有意義であったことは言うまでもないが、今回私が最も印象に残ったのは教職大学院の院生と美術科の学部生・院生とが挑戦した協働であった。

そのチャレンジは決して易しいものではなかった。その苦勞は院生のみなさんの報告に譲るが、私

は学生たちのチャレンジを見ながら自分がかれこれ14年前に初めて留学生と協働で授業づくりをしたときのことを思い出した。当時私は日本語教育を学ぶ大学院生で、私が通っていた大学院の日本語教育コースでは、日本人学生と留学生が協働しながら多文化共生の教室をつくることが実習としてあった。私はその実習に惹かれその大学院を選んだのであるが、留学生との協働、さらには新しい形の日本語教室をつくるというのは想像以上にとっても大変なことであった。準備期間の3ヶ月間は毎日打ち合わせを行い、そのたびに留学生と衝突した。持っている前提や価値観が異なるのである。おそらく今回

専門も違い年齢も違う学生たちの間で似たようなことが起こっていたと思う。でも、これがもし知識を伝達するような授業だったら、そうした衝突はそれほど起きなかったのではないかと思う。私が大学院生のときに挑戦した教室も、従来の文型や言葉を教えるのではない新しい形(日本人住民と外国人住民が共生していくために共に探究する形)の授業であった。今回衝突しながらもお互いを信頼し最後まで粘り強く対話を続け生み出した自分達の実践をどうか大事にして欲しいと思う。今はまだ大変だった気持ちが先行し学びとして捉えにくい部分があ

るかもしれない。でもそれでいいと思う。おそらく次に自分と背景や専門の異なる誰かと協働していくとき、あるいは教員として子どもたちの協働学習を支えていくときに今回の経験がきっと支えとなるだろう。

今回、上海の学生と協働する機会にも恵まれた。上海の学生は日本語を理解するものの、言語の壁を越え協働していくことの難しさとおもしろさを実感できたと思う。最後、みんなと上海の学生との間でがっちりとかかわされた握手に、次の世代の頼もしさと大きな可能性を見たように思う。

上海での経験を現場で活かすために 山田 芳裕

2月末に開催された福井ラウンドテーブルが終わり、慌ただしい日常が続く中、2月29日～3月3日の4日間、上海師範大学の学校訪問および、授業実践(上海研修)に参加した。振り返れば去年の夏の終わりに、森透先生の「上海に行きませんか?」のお声かけが全ての始まりであった。本学大学院美術科専攻の院生との交流。上海の土地での授業。中国の子ども達の前での実践。知らない土地、場所での実践ができるというお話で、すぐに参加の意志を固めた。不安や緊張も少しあったが、何よりも全然知らない出来事にチャレンジしたいという思いの方が強かった。この上海での経験が、インターンシップをさせて頂いている中藤小学校で役立つのではないか。更に、近い未来スタートする、教師人生の糧になるのではないか。様々な思いを胸に上海へ旅立った。

上海に降り立つとすぐに、上海師範大学へ向かった。明日行う授業実践の流れを確認していた矢先、ある知らせが飛び込んできた。授業実践を行う「場所」と「時間」の変更であった。午前は、上海師範大学実験校(附属小学校のようなもの)の2年生クラスで35分間、午後は嘉定区南苑小学校(上海の郊外の学校)で120分間という変更の知らせであった。事前準備として、福井大学教育地域科学部附属小学校(大橋武史先生学級)で出前授業をさせて頂いていたが、同じような内容での実践は難しいという判断になり、急きょ授業内容の変更をしなければいけなくなった。

話し合いの中で、「誰のために授業をするのか?我々教師?子ども?」、「この授業を行う上でのそのその目標は?」など様々な点が浮き彫りとなった。我々教職大学院と美術科との思いのズレや、各々の考えの共有が出来ておらず、話し合いは難航した。そこで私が最も感じたことは、「授業は誰のために行うのか?」といった問題提起である。学校現場において最も重要なのは授業である。その授業は当然ながら

子ども達が受けるものである。子どものことを考えずに授業を組み立てることは、長い見通しを持っていないと考える。授業を通じて、どのようなことを子ども達に学んでもらいたいのか。子ども達に付けてほしい力とは何か。「子ども」のことを一番とって考える授業こそ、これから求められる授業ではないだろうか。学部生時代の教育実習では、恥ずかしながら授業を組み立てる際は自分のスキルアップのことばかり考えていた。もちろん、教師としての力は欠かすことの出来ない点である。しかし教職大学院に入学し、「授業の本質的な部分」を意識した実践を通して学んでいく内に、「子ども」が主であることを学んだ。今回の上海の実践は知らない子ども達であり、1回限りの授業である。日本の教育との違いを見ることは重要であるが、やはり子ども達のことを一番に考える必要がある、と確信した。また別の院生と腹を割って話す内に、新たな視点や、美術の専門的な立場からのアイデアをもらうことも出来た。当初は予想外のハプニングに困惑したが、それをきっかけに、より深い視点を持って授業を作る意識が変わっていった。そしてなにより皆で意見を出し合い、試行錯誤し、授業を創りあげることの大切さを経験した。上海という日本と離れた場所での実践経験が、国内でいるだけでは考えもつかなかったアプローチや、手法を導いたのではないかと思う。

当日は予期せぬ事態により、授業時間がまた変更になったが、臨機応変に対応し、授業としての形を保つことが出来た。子どもの反応に関しても、日本の子どもと似ている点が多く、盛り上がり集中したりする様子は同じであった。不安要素であった言葉の壁も、通訳の方との関わりの中で解消し、ボディランゲージで十分伝わることも分かった。しかし子どもの「つぶやき」を拾うことが出来なかったことが心残りであった。その後も幼稚園見学や、現地の学生

との関わりを通して、異文化を肌で感じ驚きの連続であった。

今回の上海研修で、改めて「子どもを主体」とした授業作りの考えを捉え直すことが出来た。またこの

経験をインターンシップに生かし、インターン先の子どもにも、文化の違いを伝えたいと思う。本当に貴重な経験が出来、携わってくださった全ての人に感謝し、これからも前進していきたい。

謝謝！！ 池田 文明

1. はじめに 今回の上海研修の目的は、福井大学美術科の院生及び学生と教職大学院の院生が協働して、中国の子供たちに授業実践することである。そのために今年1月から準備をして来た。具体的には、木曜カンファ後の約2時間授業の進め方や内容を話し合い、事前に附属小学校4年生にその授業を実践した。そこでつかんだ「何か」を携え、我々は上海に旅立った。

2. 日常に溢れる「想定外」 中国という国は、実に面白い。2007年から1年間北京に語学留学し、さらに仕事で3ヶ月湖南省にいたが、この日々の中で1日たりとも飽きることはなかったように思う。なぜなら毎日、「想定外」に遭遇するからだ。そして今回の上海研修も例外ではなかった。下記に大きく3例紹介する。1つ目は、授業そのものが出来ない可能性を、出発前の集合時に告げられたこと。(しかし到着後、2つの学校で2回実践出来ることになった。) 2つ目は、1校目での実践はしっかり時間をもらえ35分フルでできたが、2校目では当初120分もらえるという話が展示物や授業見学のため、急遽40分弱になったこと。(本当に慌てた。) 3つ目は、森先生と松木先生が日本では見たことがない姿になったこと。現地でも重要な会議などでは「キリッ」とされるが、それ以外のとき、特に食事前後では「ゆるっ」とされる。(森先生は普通の椅子をマッサージチェアに変える力を持っている。)

3. 授業実践で感じたこと 1校目も2校目も、私は小グループのTTとして入った。どちらの子供たちも、日本と変わらず、年相応のリアクションを見せてくれた。「外国人のおもしろい授業を受ける！」ということで盛り上がったのだろう。結果的に子供たちから「友達と協力するのが楽しかった」「また来てやってほしい」など意見が聞けたことで、すこしばかりの成功感を抱くことが出来た。「日本の子も中国の子も、子供は子供」と痛感した。是非またやりたいと願う。



4. 授業外で感じたこと 「研究集会はたった1日だけ。プロセスを見なければ、本当の学びとは言えない。」これは、合同カンファであるリーダーの先生が言われたことである。私は参観に行く時、常にプロセスの痕跡を見つける

ために尽力している。ここ上海において、そのプロセスに目を向けると、なんとも言えない感覚に襲われた。それは各学校でお決まりのように案内してもらった作品展示室の子供の作品である。作品にプロセスが詰まっていると考えている私は、それぞれの作品をじっくり見てみた。ご覧の通り、作品としてはとてもいい感じに出来ていると思う。技術的にも繊細で、緻密に、しっかりと細かい部分に施しがされている。しかし、なんとも言えない。私は、このなんとも言えないモノが一体何なのか、自分の中に探し求めた。すると一つの答えが出て来た。「作品から、何もメッセージを感じない」ということだった。それを裏付けるように、2校目では墨を使った葉の描き方の授業をしていた。「葉を3枚と5枚セットで描く」という技法を先生がOHCでレクチャーして、子供が真似し作品を仕上げるといったものだった。そこである一人の女の子が目にとまった。最初、手元にある葉を線で自由に描こうとしていた。しかし途中から友達の作品をみたり先生の指導を受けて、OHCと同じような絵を描いて行く。そのときふと、中国の「科挙」のことを思い出した。かつて約1300年間にわたって行われた超暗記試験である。より多く覚えた者が勝つ、シンプルで分かり易い画一的な試験。その歴史を踏まえて子供の姿や作品を見ると、この国ではむしろ「メッセージが無い方が美」である可能性もあるので考えた。だが、葉っぱ一枚の描き方においても、目の前で子供の可能性が一樣に染まって行く姿に、なにか寂しさを覚えずにはいられなかった。どっ

ちが良いか悪いかは別として、子供のために自分がどうやりたいのかを考える良い機会をくれた研修だった。

5. おわりに 最終日、幼稚園にもお邪魔させてもらったが、その教育が非常に日本と似ていると感じた。子供が楽しく、能動的に学んでいるのだ。そんなことも学べた上海研修。改めてこんなステキな機会を与えた下さった森先生をはじめとする先生方、夜な夜な一緒に話し合った仲間、感謝の意を伝えたいと思う。

謝謝！！

Hello, Shanghai 増谷 淳

現地では非常に稀だという晴天のもと、3月初頭に上海研修が行われた。私には英語科という肩書きがあるため、異文化理解の絶好の機会だと期待した。ところが英語が通用することは少なく、通訳の方々を通してでないとコミュニケーションは苦しいものであった。聞きたいことを聞けるという機会は少なかったが、小学校や幼稚園の見学をしたり大学での学術交流の機会を頂いたり充実した日々であった。五感を通して触れた上海での経験について、実際に訪れたことで学んだ内容をわずかながら紹介したいと思う。

学校見学では特に芸術教育に力を入れる学校に伺ったこともあり、芸術作品や制作環境の豊かさを感じられた。特徴的だったのは水墨画で葉の絵を描く時間。日本で扱うとなると、濃淡を上手く使い自由に楽しむ時間というイメージがある。一方、上海の授業では筆遣いの細かな技法を先に指導していた。点と線、濃さや大きさ等を繊細に使い分けることで、描画技法を養う時間となっていた。実物を手に持ちながら描く子どもたちは、本物そっくりな葉を表現しようと真剣そのものであった。小学校段階で詳しい技法を教えていることとともに、大人顔負けの葉が描く子どもたちの能力には驚かされた。

これだけ述べても知識や技能に厳しい環境であるように伝わってしまうが、実際の子どもたちには明るく元気な雰囲気が広がっている。私が(たどたどしい発音ではあるが)「ニーハオ」と言えば笑顔で応えてくれる。私たちが持ち込んだ絵を見せれば、(何を言っているかは分からないが)声を上げて鑑賞を楽しんでいた。素直な子どもたちの様子は、日本とほぼ変わらない印象を受けた。

上海政府の教育方針の1つに「学校ごとで特色を出すこと」があるそうだ。上記の学校では「授業を通して物事の全てを見る」ことをねらい、芸術や体育に力を入れていた。芸術作品を多く掲示したり授業を自由選択できる時間を設けたりするなど、確かに強い特色は見られた。その中で校長をはじめ学校全体で確固たる指導方針を守っているようにも感じた。指導方針を堅守しながら学校の特色を出している点は上海の学校の特徴といえそうだ。

同様に見学した幼稚園でも興味深い話を聞くことができた。この園では「芸術への熱い気持ちを養う」ことを指導方針に立てている。日本の幼児教育

なことも学べた上海研修。改めてこんなステキな機会を与えた下さった森先生をはじめとする先生方、夜な夜な一緒に話し合った仲間、感謝の意を伝えたいと思う。

といえば、「表現」だけでなく「人間関係」、「健康」など5つの領域が中心である。この園では芸術分野とは別に、幼児の人間性の成長についてどのように考えているかを尋ねてみた。すると、「授業を通して実感する」という答えが返ってきた。例えば音楽の授業で子どもが踊る場面は、お互いのダンスを鑑賞し合いコミュニケーションをとる機会になるという。すなわち、授業を通して表現能力や人間性を横断的に育んでいるということだ。先に紹介した学校同様、授業を通して子どもの心身を育てているようだった。どちらの学校も育てたい子ども像がはっきりしているように感じられた。

また、上海市の大学では教員養成課程に在籍する学生との学術交流の機会が与えられた。彼らも学部段階で教育実習や授業参観を経て教師になる準備をしているようだ。この点は日本のカリキュラムとかなり似ている点といえよう。私たちも日頃の実践について紹介することができたため、教師を志す者同士でいい刺激をもらうことができた。



異文化理解の機会と考えることで、自分たちとは異なる価値観や営みを探そうとする自分がいた。しかし、いざ現場を見させていただいたこと

で、似ている点が目についた。教育方針や細かな指導方法は異なるとはいえ、授業を通して子どもたちの心身全体を育む姿は、私の身近な先生方の熱意を彷彿とさせた。子どもたちの元気で明るい様子や授業に取り組む真剣な姿を目にした際には、日頃のインターンシップが脳裏によぎった。大学での学術交流も含め、同じ教師として子どもと関わる同志を見つける機会になった。異文化理解というよりも、上海の学校や先生、学生たちに負けていけないという思いの方が強く残った。これほどまでに貴重な経験をさせていただいたことにこの場を借りて感謝の意を述べるとともに、私自身が今後教師として活躍することで恩返しとしたい。いずれは今回出会った同志と上海で再会し、紹興酒でも交わしながら語ることができればこの上ない幸せだ。謝謝。

上海の学校から見た教育文化の違い 松山 琴美

はじめに 2月29日から3月3日の4日間、福井大学の訪問団の一人として上海のいくつかの学校を訪問した。今回の目的は、福井大学の美術科の学生と院生、教職開発性専門コースの院生が共同で中国の小学校で異文化理解を重視した美術鑑賞教育の実践を行い、新しい鑑賞教育の方法を開発すること、自分たちと同じように中国で教員を目指す大学生や日本語を学んでいる学生と交流し日中の教育の違いを学ぶことの2点である。外国の学校を実際に見たことがなかったため、今回の訪問はとても楽しみだった。今回の訪問で感じた日中の教育の違いを考察していきたい。

1. 上海の学校を訪問して 今回訪問した学校は、上海大康城実験学校(小学部)、嘉定区南苑小学校、黄浦区荷花池幼稚園の3校である。いずれの学校も足を踏み入れた第一印象は、美術に関する分野ではエリート校だということである。造形室に限らず、そこに至るまでの廊下には、生徒や美術科教員の優秀な絵画、書、陶芸などが飾られているのである。子どもたちは、その空間にただで美術の世界に触れることができるのである。これはどこか教科センター方式の学校である教科エリアと同じ役割をしているのではないかと感じた。どの校長先生も口をそろえていうのは、自分の学校の優れた教育である。実際に授業を参観させていただくと、授業では、日本のように児童・生徒の興味がある題材を設定し、自ら考えて表現した作品の違いを楽しむという授業ではなく、先生が手順を説明し、表現する技術の獲得、向上を目指した授業が多かった。このことから、中国で求められている教員人材は、何か人よりも秀でたものがある人(一芸を持った人)なのではないかと思った。子どもたちが教師に言われた内容を素直に実行している姿を見て私は違和感を覚えた。技術を教えるのが悪いことではないが、その表現には、子どもたちそれぞれの意志がないのだ。これでは、小さな先生のクローンがたくさんいるだけになってしまう。確かに、上手に書けることは嬉しいことだが、清に美術の時間で必要なことは、描くこと、つくることのできた喜びや高揚感を味わうこと、他者との表現の違いを楽しむことが大切なのではないかと私は考えている。

2. 授業実践から見えたもの 今回、実践を行ったのは、上海大康城実験学校(小学部)の2年生の授業1時間(中国では35分で1時間の授業)と嘉定区南苑小学校の4年生の授業1時間である。言葉が通じないため生徒とのコミュニケーションは簡単な英語とジェスチャーであった。(どうしても分からない場合

は通訳の方に訳していただいた)前者の授業では、生徒を8つのグループにわけ、グループそれぞれで世界児童画展に出展された絵を見てジェスチャー(体全体を使って表現する)をつくり、全体でどの絵のジェスチャーなのかクイズ形式で考えていった。いきなりジェスチャーをつくることは難しいので、始めに見本として、院生が考えたジェスチャーを見てジェスチャーに対する認識を深めていく。中国では、あまり鑑賞の授業は行われないそうだが、どの児童も顔を輝かせて楽しそうに表現をしていた。私の班では、川で体を洗う人の絵からジェスチャーを考えた。見本のジェスチャーでは、人物よりも木や鳥など背景を表現したものが多かったからか、子どもたちの関心は周りのバケツや鳥、虫など背景を表現したがる児童がほとんどだった。絵の中で分からないものがあると「あれは何?」と尋ねてきて体を洗っている女の、「水を汲む桶」と説明するようになるほど楽しそうにまた様々な動きを試していた。始めは恥ずかしそうに、表現していた児童も「Good!」と伝えると嬉しそうに次は堂々と動きを大きくして表現していた。

後者の授業では、世界児童画展の絵からお話を考えて身体表現で表し、全体で発表した。以前、似たような内容で、付属小学校で実践を行ったときは、絵に描かれていない内容まで想像し、表現をしていた。しかし、中国の子どもたちは、絵に描かれている瞬間のみを表現していたのである。授業を参観していたときも感じたことだが、子どもたちは事象を考えるのではなく、そのまま事象を受け入れることが当たり前になっている。このことは、子どもたちの素直に受け入れる行動がそのまま表に現れたのではないかと考える。

これらの授業では、個人の活動では得られなかった他者と協力して達成したときの達成感や楽しさを子どもたちは感じていたのではないかと思う。私にとっても、子どもたちにとってもこの実践は未知のものであり、それに挑戦することは私たちにとってわくわくするものだったため笑顔が絶えず、楽しく活動できたのではないかと考えている。言葉は通じないけれど、身体表現をするという教材で私たち院生と子どもたちは繋がることができ、感情を共有することができたと思う。

3. 中国の学生との交流から 教員養成課程の大学のカリキュラムで一番驚いたことは、ピアノやダンス絵画の技術など学生の芸術を競うコンテストが定期的に行われていることである。自分の在籍してい

た大学では、切磋琢磨というよりは協力して成長していくというプロセスが多かったように思う。しかし、中国の大学では、ライバル関係の中切磋琢磨することで、個人が持つ能力が飛躍的に伸びている。このことが、訪問した学校にいた一つの分野に特化した教師が育成される要因の一つではないかと思った。

異国で味わった、教育の世界 —上海での研修を通して—

福井大学 教育地域科学部 美術教育サブコース2年 高橋葵彩

今回私は、特別に大学院の方々と一緒に上海への研修に参加させていただけることとなった。現地での授業実践や、大学生・現役教員と交流することができるということで、将来教員を目指している私にとってこのような機会は2度と訪れないだろうと無いと思い、自ら参加を希望した。最初は言語も通じない異国の子どもと接することなど出来るのだろうか、正直不安の方が大きかった。しかし結果として、私はこの研修を通してかけがえのない経験を得ることとなった。

上海で授業実践を行うにあたり、約3か月間、私たちは毎週打ち合わせを行った。今回の実践では、「異文化理解」「自己理解と他者理解」というキーワードの下、題材には児童画を用いての対話型鑑賞を取り扱った。しかし計画を始めてみると問題に行き当たることも多く、特に実践前日の最終打ち合わせは、突然の授業予定の変更もあり困難を極めた。自分たちが授業で本当に成し得たいことは何なのか、何のために上海まで赴いたのか、前日になって初めて授業づくりの基盤とも言える部分に向き合った。そんな不安だらけの状態で挑んだ授業であったが、いざ始まってみると子ども達は私たちの想像以上に目を輝かせて活動に取り組んでくれた。絵を指さしながら話をしたり、絵の中のものになりきって身体を動かしたりしていた。ここで私が苦労したのは、子どもとのコミュニケーションである。言葉というツールが使えないこの場合はまさに、意思疎通の極地である。私はジェスチャーや少しの英語など、使える限りのツールを用いて言葉を伝えようとした。すると子ども達は自然に私の言いたいことを汲み取ろうとしてくれた。それが一番嬉しかった。最終的にこの実践は、現場での予定変更が重なったこともあり慌ただしいまま過ぎていってしまった。子ども達はこの活動を通して何かを得てくれたのだろうか、と不安に思う点もある。しかし、楽しんで活動してくれたことだけは事実である。計画から実行まで様々な問題に直面し、回り道もしてきたが、その過程も今になって意味のあるものであったと感

終わりに 中国の教育から日本は学ぶことが多いと感じる。系統的に積み上げて子どもたちの技術力をあげているという点など自分の教科教育の実践に繋げていけるものがあるはずである。視察後のインターンシップでは、今回学んだことを生かす実践を行うことで、子どもたちに少しでも還元していきたい。

じている。授業を計画する上で何が大切になってくるかを実感した授業実践となった。

また授業実践以外に、校舎・授業の見学や先生方との研究会も行うことが出来た。実際に現地の先生方と言葉を交わすことで見えてきたのは、中国の「教育観」である。私たちの実践に対し「なかなか見られる授業スタイルではない」「自分たちも取り入れていきたい」と話してくださった一方、「絵画技法は教えるのか?」「スケジュールは?鑑賞学習の比率は?」など子ども達の技術面に注目した質問が挙がった。見学させていただいた授業も、知識や技能に重きを置いた構成となっていた。少し前までは日本もそれに近かったが、今は子どもが主体となって動くことが重要視され、知識だけに留まらない授業づくりが求められている。しかしここで、知識・技能重視が決して悪い授業というわけではないことに気づいた。その土地の歴史や文化、価値観があって教育がある。だからこそ国によって教育観の差はあって当たり前なのだろう。国によるその相違を感じる事が出来たと同時に、それらを通して改めて日本の教育の課題も見つめ直すことが出来たと思う。

今回の上海研修を通して、私は一生得ることのできないものを持って日本に帰ってきた。先生・先輩方の助言や上海の人々との交流、初めての海外で味わった風土や文化、いろんな所からたくさんの刺激をもらった。これらは必ず今後の糧になるだろう。私は学部の2年生で、まだ教育実習も経験しておらず、子どもの前に立って実践をした経験も1~2回程度である。経験、知識共に豊富な先輩方に囲まれ、とにかく私は後を付いていくのがやっとなら。しかしこの時期に行ったからこそ、得ることのできたものが確かにあった。それらを生かして今後いろんなことを学び、吸収して、いつか教壇に立てればと思う。

最後に、ご指導いただきました先生方、支えてくださった先輩方、そして上海でご協力いただいた全

ての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

絵からつながる異文化交流への扉 ～上海の小学校での鑑賞授業を通して～

福井大学大学院 教科教育専攻 芸術領域（美術）M1 志田夕華

今回の訪問で行った「絵から感じ取ったことを友だちと体の動きで表現する」という授業では、子どもがとても活動的になれた。2年生と4年生で授業を行ったが、子どもたちの屈託のない笑顔や素直な反応は日本も中国も変わらなかった。「今から何が始まるんだろう？」と目を輝かせて待っている子どもたちの姿に、私の方もドキドキワクワクさせられた。世界児童画展で展示された作品の中の10点を子どもたちに提示した。

小学校4年生の授業では、子どもたちが食い入るように絵を見ていたのが印象的だった。私が見ていた班は、どこかの民族の儀式のような絵を鑑賞し劇をつくった。私が「ここにいる人たちは何をしているのかな？」という問いかけをすると一人の女の子が「ダンスをしてる！」と答えた。私はすかさず「この絵の中の人たちになりきってダンスをしてみようか！」というと、子どもたち同士手をつないで一緒にゆらゆらとダンスをし始めた。手も絵の中に描かれている通りのつなぎ方をしていて、絵をよく見ることが伝わってきた。また、絵の中の人物の表情を読み取るのも上手だった。一人の女の子は、絵の中で後ろの方に立っている男の人や、銅像の表情を真似するのがとても上手だった。その女の子が同じ班の男の子に「ねえ、この人やってみてよ！」と自分が今真似をしていた絵の中の人物を指さして言った。その男の子は「えーっ？（ちょっと恥ずかしがりながら）こう？」と言いながら真似をした。すると女の子は「違うよ！笑っちゃダメなの！ほら、よく見て！（絵の人物をもう一度指さしながら）この人は真顔でしょ！」とA君にアドバイスを行っていた。（言葉は分からなくても何となく会話が理解できたのが不思議だった。）他にもさまざまなやりとりが子どもたちの中で行われ、子どもたちが絵と真剣に向き合う姿が見られた。絵に登場する人物や動物、木や波や雲や太陽などになりきってみることで、その絵を描いた作者の思いや、文化、国について一歩踏み込んで考えることができたのではないだろうか。

小学校2年生の授業では、「友だちの今の発表はどの絵を表していると思う？」とクイズ形式で絵を

当てていった。子どもたちは楽しそうだったが、動きで表現するというよりは絵を静止画像で再現しているものが多かった。2年生には動くものは動物だけだと思ってしまっているところがあった。風に揺らぐ木、少しずつ動く太陽、きらめく波、人の表情といったものが4年生の方は表現できていた。また、絵を見て「私はこの役をするね。」と配役を決めてから動きを考えていた。私が見ていた4年生の一つの班は、絵の中で見えるものすべての役に一通りなってみたり動いたりしてから自分がやりたい役を決めていた。4年生のやり方の方がより深く絵を見ることができるとは感じなかった。4年生ではどのグループも大なり小なりこちらのねらい通り動きを伴った身体表現に仕上がっていた。「絵から感じ取ったことを体の動きで表現する」ということが、2年生よりも4年生の方が年齢的に理解できたのかも知れない。

2年生も4年生も絵を隅々までよく見て感じたことを表現していた。（絵をよく見ないと表現は出来ない。）子どもたちがグループの中で活動しているときには、どの子にも役割があって生き生きと動いていた。

今回の鑑賞の授業で、子どもたちと一緒に、絵から感じ取ったことを体の動きで表現していく中で、「人とのつながり（子どもたち同士、教師や学生や通訳と子ども、教師同士など）」について考える機会をもてた。話し合いや発表を安心してできる環境、活動中の子どものサポーターの存在があったからこそ、実現できた授業であった。また、鑑賞学習の取りかかりにふさわしい作品を提示することの大切さについても考えることができた。教師が同年齢の世界の子どもたちが描いた絵を鑑賞させることにより、子どもたちはその絵を身近に感じたり興味をもったりすることができた。

作品の中に込められた作者の価値観を見つけたり、触れたりすることを助ける取り組みには今回行った授業の他にどんな方法があるのかをこれからも考えていきたい。そしてその方法を鑑賞学習における異文化交流の中で役立てていきたい。

絵は繋がりを創る 福井大学大学院 教科教育専攻 芸術領域（美術）M1 服部知真

「世界児童画展」の絵画作品を使った異文化交流は、人と人が言葉を越え繋がる可能性を感じた。上海に滞在した4日間で、私がキーワードとしたいのは「言葉を越えた繋がり」である。

私はプライベート等で海外に行ったことがなく、まして授業を計画して実践するというので、初めてのことばかりな日々を送っていた。そのため、授業実践から学校見学、私たちの実践発表等、その全てが私にとって学びとなった。中でも授業実践で得た気づきが大きな学びである。

授業は、「世界児童画展」の作品を見て、それを元に劇にするものである。身体全体を使って鑑賞を行うことがポイントである。最終的に撮影する。一般的な鑑賞と言われると、目で見て絵の様子を口で伝えたり、紙に文章で書いたりすることを想像する。私自身も鑑賞と言われると、やはり目でみて批評的な視点で見ることが多い。

上海の児童たちは「世界児童画展」の作品を見ると、食いつくように作品を見ていた。それほどに、この絵画作品は珍しいものだったのだろうか。また、鑑賞教育が盛んに行われていなかったため鑑賞の時間が少ない。その中で、鑑賞を、しかも普通の鑑賞ではなく体を動かして作品と触れることがどれだけ彼らにとって新鮮だったろうか。

上海の2回の実践では、どちらとも身体を使ったコミュニケーションがお互いを繋ぐきっかけになった。例えば絵に描かれている、手と手を合わせて

視線が左に向いている男性を私がやってみる。それを児童の前でやってみる。児童はそれを見て笑って、反応を示してくれた。

最初、私は言葉がつかえない中でコミュニケーションをとれることができるのだろうかという不安を持っていた。日本の実践においては、言葉と身体との2つを使って、児童と学生の相互理解の元で劇化が進められていった。

ここで考えたことは「笑って」反応してくれたということだ。その時の自分の立場としては、どうしたら児童の輪の中に入ることができるのかということばかりであった。その時に、絵を通して私が描かれている人の動きを真似して見せていくやり取りを見て彼らが笑ってくれたのが、一歩彼らの輪の中に入れたように思えた。これは、日本でも言葉ではなく行動や態度で児童の輪に入っていくことが大事なのはおなじかもしれない。

そのためのきっかけの1つとして、今回は「絵」であった。絵は、色や形といった要素から無限の想像が膨らませられた。その想像は、自身の経験の中や自国の文化から来ているのだろうけど、それらを想像しぶつけ合えることが快感であった。

そして絵は言葉を越えて異国の地でも伝わる、共有することができる。また、同時に身体の動きも共有することができる。それは当たり前なことかもしれないけど、初めての海外実践で、自ら体験したからそう思えるのだ。

日本人同士で起こった異文化交流 ～上海でつながった教職大学院と美術科～

福井大学大学院 教科教育専攻 芸術領域（美術）M1 安本晃央

前置き 私は上海で授業実践を行うのは2回目（平成25年12月23日～26日）、前回は小学生を対象にアルミホイルを使った造形遊びの実践を行った。帰国後「START LINE」にて、上海の子どもと素材を介することで、言葉を無しにつながり合い、異文化と交流できたことを述べさせていただいている。そして、今回は教職大学院の学生と私が所属する芸術領域（美術）（以下、美術科）の学生がコラボレーションしたことで起きた、日本人同士の異文化交流という視点で執筆していきたい。尚、飽くまで私の意見であることご了承ください。

始まりは突然に 私を含めた3名の美術科の学生は、講義の一環として上海で授業することが決定しており、教職大学院の学生からは、5名が有志として集められた。実践の内容としては、世界児童画展

で展示された絵を使って、日本と上海の子どもたちへ異文化交流を目的に鑑賞の授業をしようと考えていた。美術教育を学んできた私たちとは違い、別の科目の教育を学んできた教職大学院の学生は、異国で美術の授業をすることにとってもストレスであったと思う。しかし、私としては美術に少なくとも興味を持って、子どもたちとふれ合おうとしてくれたことを嬉しく思っていた。

毎回の会議ではどのような授業を展開すれば、子どもたちは美術や異文化と楽しく触れ合うことができるかを考えた。120分の授業の中で、子どもと学生たちの目標を達成させるため何度も試行錯誤を繰り返し、「移動式動画美術館」という題材を作り上げた。子どもたちが絵を五感で読み取り、身体表現として劇にすることで、より絵の世界に入り込

み、鑑賞を、美術を楽しむことができるのではないかとというねらいがある。この授業はまず、附属小学校の子どもたちに向けて行った。

違和感も突然に 会議を重ねるにつれ、美術と教職大学院同士で授業の展開方法や目標に、何か違和感を持ち始めていた。そんなモヤモヤを持ちながら上海のホテルで行った授業前日での最終調整会議でその違和感が露わになった。それは美術科と教職大学院の根本となる目的の違いであった。

美術科は美術を通して異文化交流をしながら、お互いの子どもたちが単純に美術という教科を楽しんでほしいという子どもの内面的、抽象的な目的を掲げていた。また、教職大学院の学生としては、子どもに嘘をつかないように授業者のセリフ一つ一つまでを組み上げ、行為に意味を持たせるような具体的な目的を掲げていた。そんなお互いの目的の違いが、お互いの「やりにくさ」を生み出していたように思う。美術を楽しませてあげたいという美術科の気持ちは、教職大学院にとっては、教師の自己満足であると言っていた。対して、美術科はきちんと組み上げられていた授業に対し、教師が自由でないから、子どもが自由にならないし、形だけで楽しくないと感じていたのだ。それぞれの気持ちはこうも上手くぶつかり合うとは思ってもいなかった。それは、お互いの専門を大切にしているからこそ生まれた衝撃であり、これまで学んできた経験を信じて

起こったぶつかりだったので、攻め合うことはなくお互いを認め合うようにつながりあい、話し合いが終わった。経験や専門、考え方の違い、それらが生んだ私たち学生にとっての異文化交流だったのだ。実践の結果は様々な課題を見付けられるいい授業となった。日本と上海の子どもたちもたくさん笑い、新たな絵の鑑賞方法を楽しんでくれていたように思う。

まとめ 現場に出ている教職大学院の学生は言うこと、為すことが全く違う視点で、関わり合う中でとても勉強になった。私の中で曖昧にされがちであった評価すること、に対して教職大学院の学生は、いとも簡単に答えられた時は瞳孔が開きっぱなしであったことを今でも覚えている。そして、同時に悔しさを感じた。

また、様々な教科を超え、それぞれで培った能力やプロセスを子どもたちの中で学びのつながりを作り、応用し考えられる力を育むことが求められている。教科の専門があるほど、専門に特化した子どもに育てて欲しい能力を重視してしまうが、協働していくことは、そうではないことが今回の実践で気づかされたことだ。お互いの気持ち、目的、考え方、それらをつなぎあうことがコラボレーションに必要なことであるのだ。

(注記：美術科学生・院生所属は2016年3月時点)

パブリックに美術教育の取り組みを発信するアトリエ —上海市荷花池幼稚園のアトリエ

視察を通して— 福井大学教育学部初等教育コース 濱口由美

1、はじめに

今回が3回目となる上海視察では、初めて幼稚園視察の機会を得た。訪問先となったのは、上海市荷花池幼稚園。荷花とは「蓮の花」のことだそうである。ディズニー映画のようなファンタジックな室内装飾が施されている園内においても、蓮の花がモチーフとなったオブジェや教室プレートが目についた(写真1)。

荷花池幼稚園は、芸術教育推進のモデル校である。訪問時に参観させていただいた二つの活動も、音楽やダンスといった芸術的活動を通して、コミュニケーション能力や異文化理解能力といった21世紀の課題に対応した力を育むことが意図された実に洗練されたものであった。廊下や階段の壁には、水墨画の掛け軸・金属のレリーフ作品などの作品がこまかく展示され、園全体がギャラリーのようであ



写真1 上海市荷花池幼稚園の廊下

る。作者も園児・小学生・大人と多世代にまたがり、子どもの水墨画作品であっても立派な軸層が

ほどこされていた。こういった園内展示からは、ここでの美術教育が「大人の美術文化の伝達」や「作品主義」に傾倒しているものではないかと想像していた。しかし、園内で見つけた三つのアトリエを巡っていくうちに、そのイメージはいつの間にか払拭させられていた。音楽やダンスといった他の芸術的

活動と同様に、子どもの成長を促すための美術教育を推進していこうとする教師たちの願いや考えが、アトリエの活動展示を通して発信されていたからである。

本稿では、荷花池幼稚園で見つけたこれらのアトリエについて、記録写真を用いて紹介するとともに、そのアトリエから見えてくる荷花池幼稚園での美術教育がどのようなものであったのか、筆者の感想や解釈的考察を踏まえて綴ってみたい。

2. 三つのアトリエを探る

(1) 絵の具遊びのアトリエ

最初に入ったのは、「絵の具遊びのアトリエ」。入口には、「トゥトゥ フォアフォア」という中国語のプレートがかかっていた。「トゥトゥ」は、子どもの色塗りといった意味をもつ言葉だそうである。

アトリエに設置された棚には、スポンジ、モップ、



写真2 モップの筆など

長靴といった日用雑貨を代用した道具（写真2）から、面相筆や油絵の具といった本格的なものまで、実にたくさん描画材が並んで

いた。だが、描画材はたくさんあっても、このアトリエには、子どもたちが絵の具遊びを楽しむことのできる空間はない。こういった描画材に加えて、子どもたちの作品や活動写真等などが部屋全体に展示されているからだ。さっそく、展示物の一つである手作りの額の中を覗き込んでみた。そこには、広い園庭で絵の具遊びをしている子どもたちの活動写真が入っていた。スポンジを使ったスタンプ遊びをしている子どももいれば、小さなボールに絵の具を付けて転がしている子どももいる。何かをイメージして描いているのではない。絵の具の感触や自分の行為の痕跡が残っていくのをただ面白がっているといった感じである。アトリエに展示されていた T シャツや油絵用キャンバスに描かれたドローイング作品も、多様な描画材を用いた絵の具遊びの延長にあるものなのだろう。筆と色のセッションから生まれた抽象絵画にも見える油絵作品が並べ

られた棚（写真3）には、「私たちのステキ色の壁」といったタイトルが表示されていた。



写真3 油絵作品が並ぶ「私たちのステキ色

このよう
な作品と多
様な描画材
をつなげあ
わせみると、
「私たちは、
『扱いにくい』『大人

用』』といったような理由で、材料や道具を簡単には制限していません。」といった教師たちの声が聞こえてくるようである。確かに、幼い子どもたちの冒険心や描きたいという衝動は、テーマや大人たちの導き以上に、こういった道具や描画材、あるいは素材との出会いから引き出される。それは、きっと中国でもイタリアでも日本でも同じであるに違いない。

(2) 光のアトリエ

次は、「光のアトリエ」。部屋には、おしゃれな白い円テーブルと背もたれ付きキューブ型椅子が配置され、その上にはパソコンが並んでいる（写真4）。天井には、小さなLEDが天の川のようにちり



写真4 パソコンが並ぶ光のアトリエ

ばめられ、窓際には遮光カーテンと蛍光繊維の模様入りカーテンが二重に付いていた。美術業界でも主流

になりつつあるメディア・アート^①への扉を拓くような素晴らしい設備が整っている部屋である。それにもかかわらず、壁に展示されたグラフィック作品以外は活動足跡を感じさせるものがなく、まだまだ発展途上の領域という感じも受けた。

目を凝らして見ていくと部屋のコーナーに小さな痕跡を二つ見つけた。一つは、光と影が織りなす世界を楽しんだと思われる写真。子どもたちの周りに青や紫の色がうごめいている。もう一つは、パソコン模型の上に、パソコンを活用して変身遊びのような活動に取り組んだのであろう活動写真が15点ほどに展示されていた。パソコン模型には「カチャと押して、ここに入ってきて」といったメッセージが、パソコンからの言葉のように記されていた。こ

の光のアトリエには、光と影、現実と仮想を行き来するといった表現活動のハード環境はもちろんのこと、大学やアーティストたちとの共同研究といったソフト環境もすでに準備されていることを考えると、今後の可能性が拡張していくうらやましいアトリエである。

(3) 線のアトリエ

最後は、「線のアトリエ」である。三つのアトリエ中では一番広いにもかかわらず、やはり子どもたちの活動スペースはほとんどない。その代わりに、写真5のような大きな共同作品や教材、多様な素材が、



写真5 点と線の共同作品

部屋いっばいに展示されており、幼稚園で取り組まれている造形活動の長期的な活動プロセスが見えて

くる。特に、意図的に残されたと思われる板書からは、園での造形表現活動が、線の造形理論を礎にして、園児たちの持っている力やエネルギーを活かしながら、独自の造形活動を展開させていこうとしていることが伝わってきた。

写真6が、その黒板である。多様な点や線のサンプル資料と活用例としての作品が手引書のように並んでいる。



写真6 アトリエの黒板

これらの、造形活動を通して出会う多様な点や線が造形活動における重要な基本要素となること

を意識化させるための教材であろう。その周りには、指導者が説明時に描いたと思われるチョーク絵(蜘蛛の巣)や子どもたちの線描遊びのワークシートが貼られている。おそらく指導者は、このような教材を活用しながら一本の線の変身を楽しませたり、点と線を組み合わせることで生まれる模様を探したりする線描の準備運動を行ったのであろう。

アトリエには、準備運動で見つけていたであろう「鋭い線、ギザギザの線、ぐるぐる巻きの線」といった異なる表情をもつ線が増殖していった作品で

あふれていた。石膏立体の表面には、植物や鳥、木や家などに見える線(写真7)が、磁器の円皿には



写真7 石膏立体に描かれた線

中心から外への動勢を感じる線が、瓶や屏風にはシノワズリ^②風の線が、紙やモノの装飾模様へと成長している。線描の活動は、さらに色彩

を構成するための点描表現や多様な素材(点の素材: ボタン・おはじき・タイルなど、線の素材: ペン・ひも・アイス棒・筆など)を用いての組み合わせ模様の活動(写真8)へと展開していた。

私は、このような「線描の活動」の足跡を追っていくうちに、かつて、現代デザインの基礎をつくったドイツの芸術学校「バウハウス(1920 - 1931)」において、教鞭をとっていたパウル・クレーの造形理論のことを思い

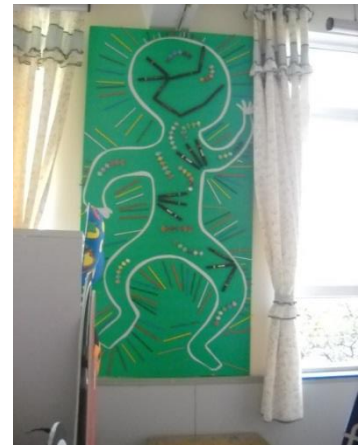


写真8 多様な素材の点と線の組み合わせ

出していた。パウル・クレー^③は、「創造的信条」という題で、何十通りもの詩的な言葉を用いて、線が豊かに変化していくさまを「心の中であっちこっちへ行く道を考える(線の束)・はじめは喜びのために一致する(線が集まる)・そのうちにさまざまな不和が起ってくる(二つの線がそれぞれの方向に惹かれる)・よく耕された野原を横切り(平面を区切る線)・愉快なちぢれっ毛のひとりの子ども(らせんの運動)」と表現している^④。クレーが、線の変化に対して、こういった言語表現を授けたのは、点や線などが組み合わせられ有機的連関を重ねることで、線がさらに豊かな交響楽を奏でるフォルムへと成長するといった線描論を形成していたからである。日本の初等教育においても、こういった線描論をベースに据えたと思われる造形実践は報告されているが、これほどまで体系的に取り組むことは少ない。ましてや、ここは幼稚園である。感覚期が未分化な就学前の子どもたちに対して、なぜ、ここまで線に執着した活動に取り組むのであろう。

このような問いを立て、再び園児たちの線を追ってみる（写真7）。すると、このアトリエで見つけた線の描き方が、低学年児が自由帳に描く「迷路」と似ているものがあることに気づく。自分と鉛筆が同化したかのように、一心に線の道をどんどん展開させていく描き方である。はじめから形をイメージしているのではない。「迷路」描きのように縦横無尽に線の道を伸ばしていったという感じにみえる。ただ、鋭い線、ギザギザの線、ぐるぐる巻きの線なども準備されている荷花池幼稚園の子どもたちからは、〇〇〇のような形が表出しやすい。そこに、園児たちのお家芸である「見立てる力」が働くと、「花を咲かせましょう」「小鳥を遊ばせよう」といった必然的な線を描こうとする意志が生まれるのではない。偶然から必然へと転化していく遊びのプロセスの中で、子どもたちもクレーのように線からも意味ある言葉が紡ぎだされることを少しずつ感じ取っていくのであろう。

線遊びの作品から活動のプロセスをこのように辿り直してみると、「子どもたちには、文字を通して言葉を獲得していくのと同様に、線や色・素材を通して豊かな言葉を獲得して行ってほしいのです。」といった幼稚園教師たちの願いが届いてくる。線のアトリエが、そのような願いを抱きながら、園児たちとともに園児のための美術教育を模索しようとする教師たちの試行錯誤の足跡でもあるようにも見えてくる。

3. 終わりに

三つのアトリエをひとつひとつ振り返ってみると、アトリエが子どもたちの興味や持てる力を引き出すために発掘された道具や材料、子どもたちの活動を通して造形理論を再構築しようとする教師の

取り組みなど伝えるドキュメンテーションの役割を担っている部屋であることに気づかされる。

荷花池幼稚園には、アトリエスタといった美術教育の専門家などが置かれてはいないようである。ただ、大学や保護者、地域の方の協力を得ながら、芸術活動のカリキュラムが考案されているとのことである。幼稚園の教師たちは、外とのつながりも活かしながら美術教育を推進していくために、自分たちの美術教育の実践プロセスがどのようなものであったのか、パブリックに表現していく場としてもアトリエを活用しているのであろう。美術教師がいない幼稚園から、美術教師としてのあるべき姿を考えさせられる。

注

①メディア・アート：ここでは、従来の美術とは違った新しい媒体（＝メディア）による表現という意味で使用。ひとつの特徴として「装置を使った表現」などがある。

②パウル・クレー：Paul KLEE（1879－1940）20世紀のスイスの画家であり美術理論家でもある。カンディンスキーらとともに青騎士グループを結成し、バウハウスでも教鞭をとった。

③シノワズリ：17世紀中ごろからヨーロッパで流行した中国趣味の美術様式のこと。ここでは、子どもたちが自国の文化に影響されて表出してくる線を説明する言葉として用いた。

④土方定一、「パウル・クレー—人と芸術」1969、クレー展カタログ 神奈川県立近代美術館

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 15K04488 の助成を受けたものです。

学位記伝達式・開講式

去る2016年3月23日(水)、コラボレーションホールにて平成27年度の学位記伝達式が執り行われました。平成27年度は、スクールリーダー養成コース19名と教職専門性開発コース8名の合計27名の院生が教職大学院を修了しました。式では、在校生やスタッフらが見守る中、中田隆二研究科長から祝辞と一人一人に学位記が授与されました。

学位記伝達式の後に、再出発のカンファレンスが行われました。各テーブルでは、M2のみなさんの長期実践研究報告書執筆の苦労話や、現在取り組みつつあること等の展望が語られました。M2からM1への世代間の継承がなされながら、M1にとってもM2に

とっても次のサイクルや挑戦に向けた、まさに「再出発」の節目となる時間でした。最後に、平成27年度をもってご退官となる森透先生と、3年間の任期を終え県に戻られる小林真由美先生よりご挨拶がありました。4月以降森先生は客員教授として、小林先生は市内の小学校の教頭先生として、また違った形で教職大学院を支えてくださいます。

卒業された院生のみなさんと森先生、小林先生にこれまでの感謝の言葉と、院生のみなさんにはお祝いの言葉を申し上げるとともに、今後もこのご縁を大切につながり合っていきたいと思っております。

(半原芳子)



本学の桜が満開に咲く4月2日(土)の午後に平成28年度の開講式が行われました。今年度は教職専門性開発コースに12名、スクールリーダー養成コースに12名、そして今年度から新設された学校改革マネジメントコースに15名の計39名が入学し

ました。また、新たに5名のスタッフが加わり今年度がスタートしました。

開講にあたり、石井パークマン麻子研究科長、柳澤昌一専攻長の挨拶があり、院生の皆さんに歓迎と激励の言葉を述べられました。院生の皆さんの挨拶を熱心に聴く表情から、緊張の面持ちの中にもこれか

らしっかり学んでいこうという期待感が感じられました。

その後、担当から年間計画や合同カンファレンス、拠点校や連携校の担当教員、履修手続き等の説明があり、記念撮影も行われました。

学校別分科会も行われ、教員、M2の方と一緒に、今年度の展望や連携について話し合いが持たれまし

た。コースを解いたメンバーでのこの時の話し合いでは緊張がほぐれ、予定された時間後も打ち解けた雰囲気でも語り合う姿がみられて、実のある開講式になりました。

入学された皆さん、共に学びを深めていきましょう。どうぞよろしくお願ひします。（小島啓市）



| 4 | 7 | 10 | 1 |
|-------------------------------|-----------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1 金 | 1 金 | 1 土 | 1 日 |
| 2 土 開講式(1・2年とも出席) | 2 土 | 2 日 | 2 月 |
| 3 日 | 3 日 | 3 月 | 3 火 |
| 4 月 | 4 月 | 4 火 | 4 水 |
| 5 火 | 5 火 | 5 水 | 5 木 |
| 6 水 | 6 水 | 6 木 | 6 金 |
| 7 木 | 7 木 | 7 金 | 7 土 |
| 8 金 | 8 金 | 8 土 | 8 日 |
| 9 土 | 9 土 月間合同カンファレンスA | 9 日 | 9 月 |
| 10 日 | 10 日 | 10 月 | 10 火 |
| 11 月 | 11 月 | 11 火 | 11 水 |
| 12 火 | 12 火 | 12 水 | 12 木 |
| 13 水 | 13 水 | 13 木 | 13 金 |
| 14 木 | 14 木 | 14 金 | 14 土 長期実践研究報告作成 予備日 |
| 15 金 | 15 金 | 15 土 月間合同カンファレンスA | 15 日 |
| 16 土 月間合同カンファレンスA(9:30-17:00) | 16 土 月間合同カンファレンスB | 16 日 | 16 月 |
| 17 日 | 17 日 | 17 月 | 17 火 |
| 18 月 | 18 月 | 18 火 | 18 水 |
| 19 火 | 19 火 | 19 水 | 19 木 |
| 20 水 | 20 水 | 20 木 | 20 金 |
| 21 木 | 21 木 | 21 金 | 21 土 |
| 22 金 | 22 金 | 22 土 月間合同カンファレンスB | 22 日 |
| 23 土 月間合同カンファレンスB(9:30-17:00) | 23 土 ※1aか1bいずれか一方に出席してください。 | 23 日 | 23 月 |
| 24 日 | 24 日 | 24 月 | 24 火 |
| 25 月 | 25 月 集中講座 (9:30-17:00) | 25 火 | 25 水 |
| 26 火 | 26 火 1a ※ | 26 水 | 26 木 |
| 27 水 | 27 水 | 27 木 | 27 金 |
| 28 木 | 28 木 集中講座 | 28 金 | 28 土 |
| 29 金 | 29 金 1b ※ | 29 土 | 29 日 長期実践研究報告締め切り |
| 30 土 | 30 土 | 30 日 | 30 月 |
| 31 日 | 31 日 | 31 月 | 31 火 |
| 1 日 | 1 月 集中講座 (9:30-17:00) | 1 火 | 1 水 |
| 2 月 | 2 火 | 2 水 | 2 木 |
| 3 火 | 3 水 2a ※ | 3 木 | 3 金 |
| 4 水 | 4 木 集中講座 | 4 金 | 4 土 |
| 5 木 | 5 金 2b ※ | 5 土 | 5 日 長期実践研究報告会(9:30-12:30) |
| 6 金 | 6 土 | 6 日 | 6 月 |
| 7 土 | 7 日 ※2aか2bいずれか一方に出席してください。 | 7 月 | 7 火 |
| 8 日 | 8 月 | 8 火 JICA GRFT: IQELSA ** | 8 水 |
| 9 月 | 9 月 | 9 水 JICA GRFT: IQELSA | 9 木 |
| 10 火 | 10 月 | 10 木 JICA GRFT: IQELSA | 10 金 |
| 11 水 | 11 月 | 11 金 JICA GRFT: IQELSA | 11 土 |
| 12 木 | 12 金 | 12 土 月間合同カンファレンスA | 12 日 |
| 13 金 | 13 土 | 13 日 | 13 月 |
| 14 土 月間合同カンファレンス | 14 日 | 14 月 JICA GRFT: IQELSA | 14 火 |
| 15 日 | 15 月 | 15 火 JICA GRFT: IQELSA | 15 水 |
| 16 月 | 16 火 ※3aか3bいずれか一方に出席してください。 | 16 水 JICA GRFT: IQELSA | 16 木 |
| 17 火 | 17 水 | 17 木 JICA GRFT: IQELSA | 17 金 プレセッション(17:30-18:40) |
| 18 水 | 18 木 集中講座 | 18 金 JICA GRFT: IQELSA | 18 土 シンポジウム(10:00-17:20) |
| 19 木 | 19 金 3a ※ | 19 土 月間合同カンファレンスB | 19 日 ラウンドテーブル(8:20-14:00) |
| 20 金 | 20 土 | 20 日 | 20 月 |
| 21 土 月間合同カンファレンスB | 21 日 | 21 月 JICA GRFT: IQELSA | 21 火 |
| 22 日 | 22 月 | 22 火 JICA GRFT: IQELSA | 22 水 |
| 23 月 | 23 火 | 23 水 JICA GRFT: IQELSA | 23 木 |
| 24 火 | 24 水 3b ※ | 24 木 JICA GRFT: IQELSA | 24 金 |
| 25 水 | 25 木 | 25 金 | 25 土 |
| 26 木 | 26 金 | 26 土 | 26 日 |
| 27 金 | 27 土 | 27 日 | 27 月 |
| 28 土 | 28 日 | 28 月 | 28 火 |
| 29 日 | 29 月 | 29 火 | 29 水 |
| 30 月 | 30 火 | 30 水 | 30 木 |
| 31 火 | 31 水 | 31 木 | 31 金 |
| 1 水 | 1 木 | 1 金 | 1 土 |
| 2 木 | 2 金 | 2 土 | 2 日 |
| 3 金 | 3 土 | 3 日 | 3 月 |
| 4 土 | 4 日 WALS 2016 UK* | 4 月 | 4 火 |
| 5 日 | 5 月 WALS 2016 UK | 5 火 | 5 水 |
| 6 月 | 6 火 WALS 2016 UK | 6 水 | 6 木 |
| 7 火 | 7 水 WALS 2016 UK | 7 木 | 7 金 |
| 8 水 | 8 木 | 8 金 | 8 土 |
| 9 木 | 9 金 | 9 土 | 9 日 |
| 10 金 | 10 土 | 10 日 | 10 月 |
| 11 土 | 11 日 | 11 月 | 11 火 |
| 12 日 | 12 月 | 12 火 | 12 水 |
| 13 月 | 13 火 | 13 水 | 13 木 |
| 14 火 | 14 水 | 14 木 | 14 金 |
| 15 水 | 15 木 | 15 金 | 15 土 |
| 16 木 | 16 金 | 16 土 | 16 日 |
| 17 金 | 17 土 | 17 日 | 17 月 |
| 18 土 | 18 日 | 18 月 | 18 火 |
| 19 日 | 19 月 | 19 火 | 19 水 |
| 20 月 | 20 火 | 20 水 | 20 木 |
| 21 火 | 21 水 | 21 木 | 21 金 |
| 22 水 | 22 木 | 22 金 | 22 土 |
| 23 木 | 23 金 | 23 土 | 23 日 |
| 24 金 プレセッション(17:30-18:40) | 24 土 | 24 日 | 24 月 |
| 25 土 シンポジウム(12:40-17:20) | 25 日 | 25 月 | 25 火 |
| 26 日 ラウンドテーブル(8:20-14:00) | 26 月 | 26 火 | 26 水 |
| 27 月 | 27 火 | 27 水 | 27 木 |
| 28 火 | 28 水 | 28 木 | 28 金 |
| 29 水 | 29 木 | 29 金 | 29 土 |
| 30 木 | 30 金 | 30 土 | 30 日 |
| | 31 金 | 31 日 | 31 月 |

* WALS(World Associate of Lesson Study: 世界授業研究学会) 2016年大会@イギリス

** JICA Group and Regional-focused Training: Improvement of Quality of Education through "Lesson Study" in Asia

| 平成28年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻/スタッフ専門分野一覧 | |
|---------------------------------------|----------------------------|
| 青木美恵 | 授業改革マネジメント/附属幼稚園 |
| 天方和也 | 授業改革マネジメント/附属特別支援学校 |
| 綾城初穂 | 臨床心理学 |
| 新井豊吉 | 障害児教育 |
| 荒木良子 | 特別支援教育 |
| 荒瀬克己 | 教育行政マネジメント |
| 石井恭子 | 理科教育・授業改革マネジメント |
| 稲井智義 | 教育思想史・子ども学 |
| 遠藤貴広 | 教育方法学 |
| 大西将史 | 発達心理学 |
| 風間寛司 | 数学教育・教員研修組織化 |
| 加藤正弘 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 岸野麻衣 | 幼児教育 |
| 木村優 | 教育学 |
| 倉見昇一 | 教師教育学 |
| 小嵐恵子 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成・障害児教育 |
| 小島啓市 | 教育行政マネジメント |
| 小杉真一郎 | 教育行政マネジメント |
| 小林和雄 | 理科教育・授業改革マネジメント |
| 笹原未来 | 特別支援教育 |
| 篠原岳司 | 教育行政学 |
| 鈴木寛 | 教育行政マネジメント |
| 田中治 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 玉木洋 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 寺岡英男 | 教育方法学 |
| 富永良史 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 中川美津恵 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 永谷彰啓 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 西川満 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 小島啓市 | コミュニティとしての学校と教師の力量形成 |
| 隼瀬悠里 | 教師教育学 |
| 半原芳子 | 言語教育学 |
| エリザベス・ハートマン | 教師教育・数学教育 |
| 廣澤愛子 | 臨床心理学 |
| 藤井佑介 | 教育方法学 |
| 松井富美恵 | 障害児教育・教師教育 |
| 松木健一 | 教育臨床心理学 |
| 松田通彦 | 教育行政マネジメント |
| 三田村彰 | 教育行政マネジメント |
| 宮下哲 | 授業改革マネジメント |
| 森田史生 | 授業改革マネジメント/附属中学校 |
| 森透 | 教育実践史 |
| 柳澤昌一 | 社会教育学 |
| 山崎智子 | 教師教育学 |
| 渡邊淳子 | 授業改革マネジメント/附属小学校 |

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2016 summer sessions

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) ・共用講義棟 / AOSSA (予定)

6/24 Fri. 17:30-18:40

6/25 Sat. 12:40-17:40

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

— チームで「育ち」を支える —

Zone B 教師教育 21 世紀の教師教育をイノベーションする

— 学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う —

Zone C コミュニティ 学び合うコミュニティを培う

— 持続可能なコミュニティをコーディネートする —

Zone D 授業研究 教師の資本を授業研究によっていかに培うのか

— 子どもと教師の学びを支えるために —

6/26 Sun. 8:20-14:00

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

【編集後記】18歳も選挙に参加できる時代を日本で目前に控え、4月から学部生たちと「18歳選挙権と教育」に関わる社説・論説を読んでいます。本号には若者たちと年長者たちが、今の時代の教育や教師である(になる)ことをめぐる悩みや思索、決意を寄せてくれました。私自身編集に携わる中で、「過去と未来の間」(アレント)に立ち、過去と未来への応答責任を引き受ける教師や大学のあり方について考えることになりました。(稲井智義)

教職大学院 Newsletter **No.83**

2016.4.16 内報版発行

2016.4.30 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdfukui@yahoo.co.jp